

吉井・雑木味遺跡

—分譲地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2011

高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は、分譲地造成に伴う吉井・雑木味遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市吉井町吉井字雑木味 614 番地他に所在している。
3. 本調査および整理作業は、高崎市教育委員会が委託契約を締結した有限会社毛野考古学研究所の協力を得て実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、株式会社黒沢商事に負担して頂いた。
5. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。
高崎市教育委員会 田口一郎・須田奈保子・滝沢匡・手島芙実子
有限会社毛野考古学研究所 石丸敦史
6. 発掘調査・整理作業は、平成 23 年 3 月 22 日～平成 23 年 9 月 30 日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「501」である。
8. 本書の執筆については I を田口、IV-1 を手島、それ以外を石丸が行った。
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

青柳美保 赤尾嘉章 浅川正行 櫻井万作 関博 本田明美 松井昭光 松村政啓 黛美幸
矢島忠三 吉田有里

【整理作業】

青柳美保 瀬尾則子 武士久美子 永島美和子 伴場りく 日沖美奈子

11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略、順不同)
株式会社黒沢商事 カネコハウス有限会社 J T空撮 伊藤明宏

凡 例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。また、遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。
3. 土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）を用いた。
4. 土層説明における含有物の量は、多量（50～30%）・中量（25～15%）・少量（10～5%）・微量（1～3%）と表記した。なお量の記載のないものは、中量である。
5. 本書掲載の第 1 図は高崎市発行 1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第 2 図は、国土地理院発行 1/200,000 地勢図「長野」・「宇都宮」、第 3 図は、国土地理院発行 1/50,000 地形図「高崎」・「富岡」を一部改変引用した。
6. 遺構略称は、竪穴建物跡：S I、溝：S D、土坑：S Kとした。

目次

例言

凡例

目次

図表目次

写真図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 地理的・歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
III 調査の方法と経過	5
1 調査の方法	5
2 調査の経過	5
IV 基本層序	6

V 検出された遺構と遺物	7
1 遺跡の概要	7
2 竪穴建物跡	9
3 基壇状遺構	15
4 溝	16
5 土坑	21
VI まとめ	38
1 雑木味遺跡の出土瓦	38
2 雑木味遺跡で確認された遺構と遺物	40
報告書抄録	

図表目次

第1図 調査区位置図	1	第16図 SI-12	14	第31図 SK-09	24
第2図 遺跡の位置	2	第17図 SI-13	14	第32図 SK-10	24
第3図 周辺の遺跡	4	第18図 SI-14	14	第33図 SK-11	24
第4図 基本層序	6	第19図 SI-10	15	第34図 出土遺物実測図(1)	25
第5図 遺跡概要図	7	第20図 SD-01	17	第35図 出土遺物実測図(2)	26
第6図 雑木味遺跡遺構全体図	8	第21図 SD-02(北側)	18	第36図 出土遺物実測図(3)	27
第7図 SI-01	12	第22図 SD-03(北側)	18	第37図 出土遺物実測図(4)	28
第8図 SI-02	12	第23図 SD-02・03(南側)	19	第38図 出土遺物実測図(5)	29
第9図 SI-03	12	第24図 SD-07	19	第39図 出土遺物実測図(6)	30
第10図 SI-04	12	第25図 SD-04	20	第40図 出土遺物実測図(7)	31
第11図 SI-05	13	第26図 SK-01	23	第41図 出土遺物実測図(8)	32
第12図 SI-06	13	第27図 SK-02	23	第42図 出土遺物実測図(9)	33
第13図 SI-07・08	13	第28図 SK-04	23	第43図 雑木味遺跡出土瓦の同範品	39
第14図 SI-09	13	第29図 SK-05・06・08	23	第44図 山王・秋間系複弁七葉鏡瓦第1段階から第3段階の瓦	39
第15図 SI-11	14	第30図 SK-07	24	第45図 調査区周辺状況	41

写真図版目次

PL 1 遺跡全景(縮川方向を望む)	SI-11 土層堆積状況	SK-11 全景
調査区全景	SD-01 全景	大形礫露出状況
PL 2 基本土層 I	SD-02 全景	PL 7 出土遺物(1)
基本土層 II	SD-02(南側SD-05部分)全景	PL 8 出土遺物(2)
SI-01 全景	SD-02 土層堆積状況	PL 9 出土遺物(3)
SI-02 全景	SD-03 全景	PL 10 出土遺物(4)
SI-02 鋳型出土状況	PL 5 SD-03(南側SD-06部分)全景	PL 11 出土遺物(5)
SI-03 全景	SD-04 全景	PL 12 出土遺物(6)
SI-04 全景	SD-04 掘り方全景	PL 13 出土遺物(7)
SI-05 全景	SD-04 土層堆積状況	PL 14 出土遺物(8)
PL 3 SI-06 全景	SD-07 全景	
SI-07 全景	SK-01 全景	
SI-08 全景	SK-02 全景	
SI-08 カマド全景	SK-03 全景	
SI-09 全景	PL 6 SK-05・06・08 全景	
SI-11 全景	SK-06 全景	
SI-12 全景	SK-07 全景	
SI-13 全景	SK-08 全景	
PL 4 SI-14 全景	SK-09 全景	
SI-10 全景	SK-10 全景	

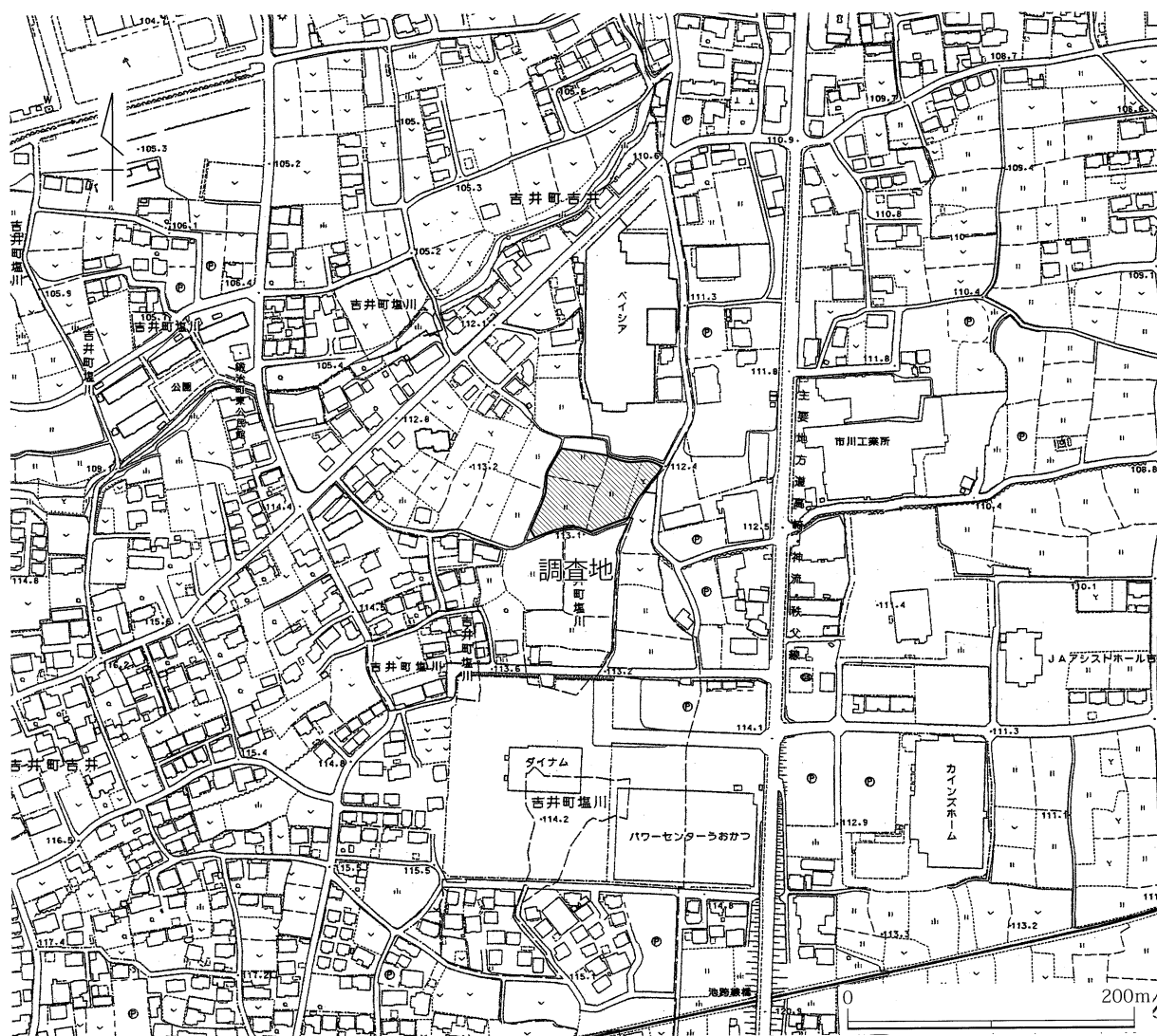
I 調査に至る経緯

平成22年10月5日、株式会社黒沢商事（以下事業者）より高崎市長に宅地開発事業計画事前協議申出書が提出され、市教委にも埋蔵文化財の状況について照会がされた。市教委は、開発地辺が古代瓦の散布地として知られた周知の埋蔵文化財包蔵地であり、当該地にも及ぶ可能性が高いことから、試掘調査による確認を実施し工事で埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年10月19日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は23年1月31日～2月1日に工事予定地の試掘調査を実施し、微高地部分で平安時代の竪穴遺構等を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、工事の計画変更は不可能ということなので、遺構が検出された微高地の道路建設部分に関し記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成23年3月14日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成23年3月22日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



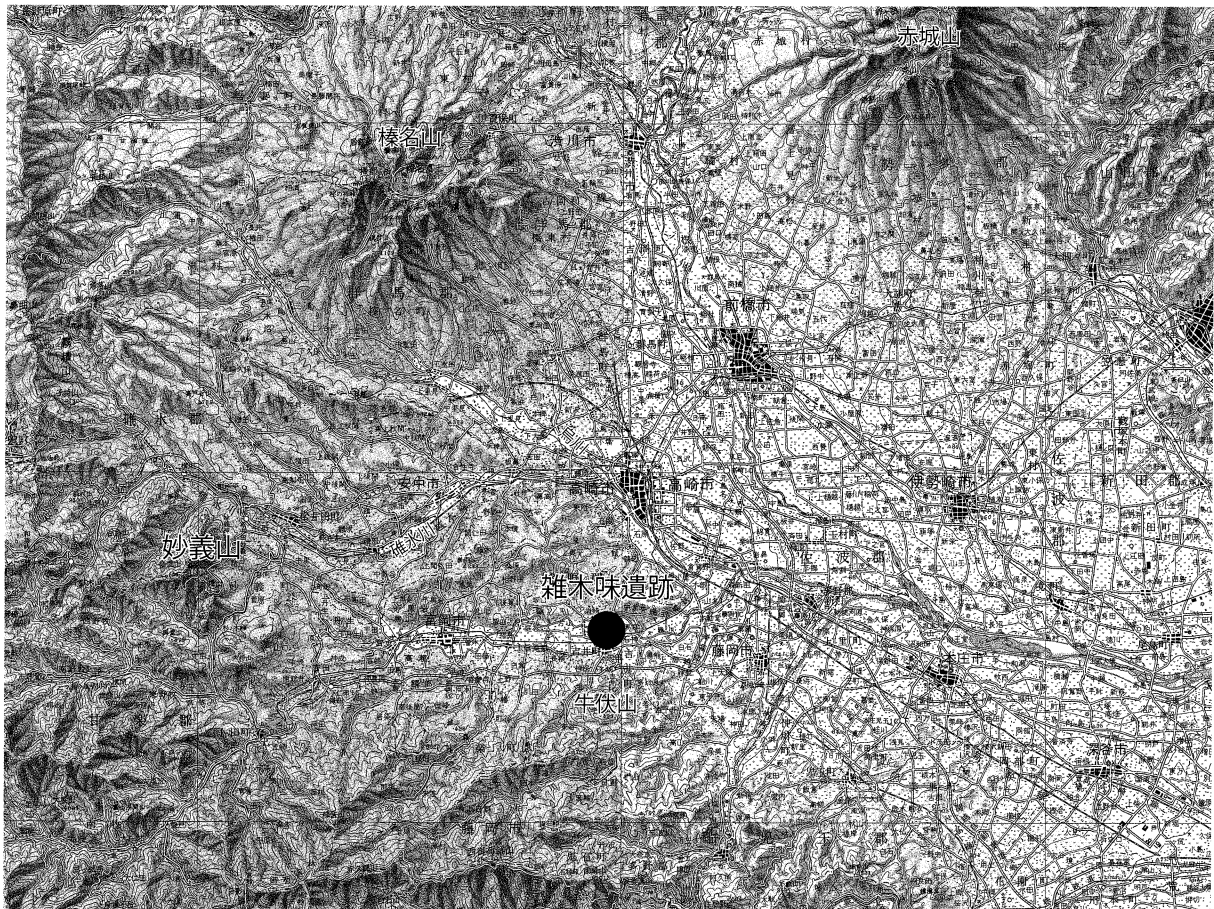
第1図 調査区位置図

Ⅱ 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

雑木味遺跡は、現在の高崎市吉井地域の中心部に位置する。群馬県南西部に位置する吉井町は 2009 年に高崎市に編入している。町のほぼ中央を鎭川が東流し、その北側に観音山丘陵、南側に多野山地がひかえており、その間の鎭川河岸段丘をおもな可耕地としてきた。多野山地の北端にあたる牛伏山は標高 490.5 m であり、北に向かって標高がいきなりに下がり、鎭川河岸段丘が広がる。河岸段丘は大きくは上位・中位・下位の三段に分けられるようで、雑木味遺跡は下位段丘（吉井段丘）に位置し、その標高は約 112 m である。ただし遺跡北西側約 150 m の位置にはさらに一段落ちる平坦面が広がり鎭川に至る。河岸段丘は鎭川に沿って東西に広がるが、南の山地から鎭川に向かって北流する河川によって分断され小丘陵を形成する。雑木味遺跡は西の大沢川と東の矢田川に挟まれている。

遺跡周辺は、長らくおもに農地となっており、旧来の地形を残していた。しかし、近年の開発等によって一部においてはその把握が困難になりつつある。



第 2 図 遺跡の位置

2 歴史的環境

吉井地域では、山麓から鑄川付近にかけて遺跡が広範に広がっている。まず雑木味遺跡の主体となる古代の前史として古墳時代を概観する。

吉井地域では、下位段丘を中心に古墳時代前期から集落が営まれるようである。ただし、前期から中期までの古墳は少数で（恩行寺古墳・吉井町 52 号古墳・片山 1 号古墳・下条遺跡 4 号古墳）、その大多数は古墳時代後期に位置づけられる。それらは小円墳によって構成される群集墳が主体となるが、その分布をみると鑄川河岸と南の山麓、上位段丘に広がっている。なお吉井地域では 6 世紀中葉以降に横穴式石室が導入され、周辺地域よりも若干遅れるようである。その中で特筆されるものとしては、安坪 3 号墳から金銅装単鳳環頭大刀や金銅製透かし飾り金具などが出土している。また安坪古墳群出土人骨は渡来系要素をもつという指摘がなされている。そして 7 世紀後半には牛伏砂岩製の切石切組積石室である多胡薬師塚古墳と多比良諏訪前古墳が築造され、律令体制との関わりが推測される。

古代になると、この一帯は生産域として上野国のなかでも重要な地域であることが指摘されている。まず山地・山麓には瓦窯跡が確認されており、金井窯跡など上野国分寺へ供給されたことがわかっている。また、黒熊中西遺跡をはじめとする古代寺院跡も確認されている。黒熊中西遺跡では、東西にのびる狭い尾根上に堂宇が並んでいることがわかっている。そして上位段丘上に広がる集落遺跡では矢田遺跡をはじめ紡錘車が多量に出土しており、布生産との関連性が考えられている。なお東大寺正倉院には「多胡郡山部郷」と墨書された庸布が屏風袋として残っている。

下位段丘には古代を中心とした集落跡が広がっている。馬庭東遺跡や雑木味遺跡など複弁蓮華文軒丸瓦が採集される箇所があり、寺院跡、多胡郡衙跡といった施設の可能性が想定されている。また多胡碑の傍には「御門」の字名が残ることから多胡郡衙の可能性が想定されているが、御門遺跡の発掘調査成果においては古墳時代から古代の集落が確認されたのみである（矢島浩『吉井町文化財調査報告第 31 集 御門遺跡発掘調査報告書』吉井町教育委員会・吉井町遺跡調査会 1995 年）。

上野三碑と総称される石碑群の一つである多胡碑は、本遺跡から北東約 800 m の位置に立地する。その内容は和銅四年（711 年）に多胡郡を新たに設置したという建郡命を記したものである。その評価については枚挙に暇がないが、この一帯が早くして古墳時代後期から渡来系文物（もしくは渡来人）を導入し、古代に至ってもそれを素地として瓦といった先進的文物を生産する地であったことがその背景にあったものと考えられる。



1. 雑木味遺跡
2. 東吹上遺跡
3. 富岡遺跡
4. 川福遺跡
5. 馬庭東遺跡
6. 東原遺跡
7. 白石大御堂遺跡
8. 緑埜遺跡群
9. 竹沼遺跡
10. 上の場遺跡
11. 白石根岸遺跡
12. 黒熊栗崎遺跡
13. 塔之峰遺跡
14. 黒熊八幡遺跡
15. 黒熊中西遺跡
16. 多比良平野遺跡
17. 黒熊遺跡群
18. 塚原遺跡
19. 藤岡吉井窯跡群
20. 金山瓦窯跡
21. 不動沢遺跡
22. 滝の前窯跡
23. 末沢窯跡
24. 下五反田窯跡
25. 東沢遺跡
26. 多比良追部野遺跡
27. 千歩原遺跡
28. 入野遺跡
29. 柳田遺跡
30. 矢田遺跡
31. 椿谷戸遺跡
32. 川内遺跡
33. 多胡蛇黒遺跡
34. 神保下條遺跡
35. 神保植松遺跡
36. 神保富士塚遺跡
37. 長根羽田倉遺跡
38. 長根安坪遺跡
39. 西場脇遺跡
40. 折茂上野場遺跡
41. 折茂東遺跡
42. 道六神遺跡
43. 砂井戸遺跡
44. 岡遺跡
45. 多胡碑
46. 山上碑
47. 金井沢碑

(多胡碑記念館『第34回企画展多胡郡古代寺院の素顔—黒熊中西遺跡—』展示図録 2009年をもとに作成)

第3図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査区は3ヶ所に分けられたため、東側区域を1区、南西側区域を2区、北西側区域を3区と呼称した(第5図)。

表土除去は、0.25m³バックホーを用いて、ローム漸移層上面まで行った。3区など一部では耕作土直下で地山礫層が確認され、それを検出面とした。

表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、層位的に遺物を取り上げるためにまずサブトレンチを東西方向に設定し、土層の堆積状況を確認した。その後、土層堆積状況をもとに層位ごとに全体を掘削した。建物跡は十字にベルトを残し、その他は適宜ベルトおよび半裁を行い、土層堆積状況を記録した。

遺構測量は、トータルステーションおよび電子平板を用い、平面図および断面図を作成した。座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて撮影した。35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・デジタルカメラ(1,200万画素相当)を使用した。

2 調査の経過

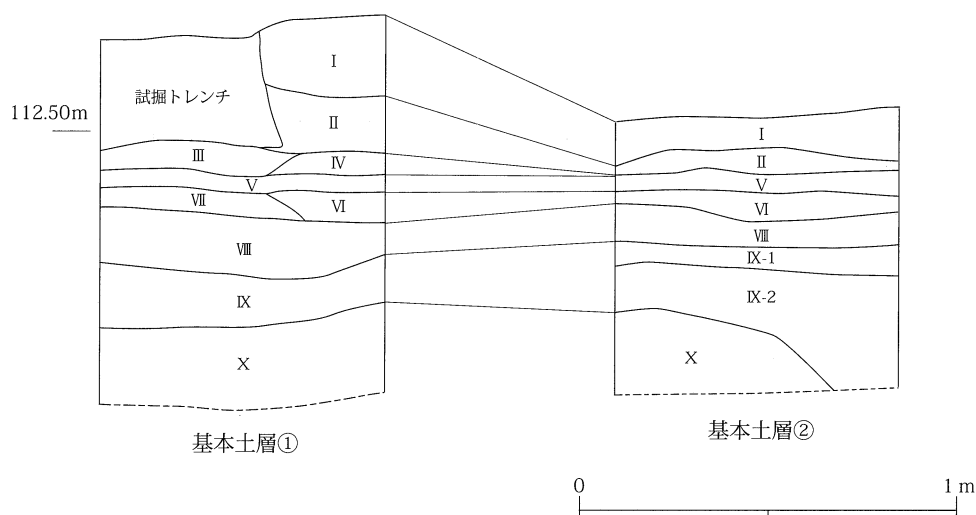
現地での発掘調査は2011年3月22日～2011年4月28日まで行った。

- 3月22日 調査区設定。機材等を搬入する。
- 3月24日 重機による表土除去作業開始。
- 3月26日 重機による表土除去作業終了。
- 3月28日 作業員による調査区整備および遺構検出作業を行う。
- 3月29日 1区より遺構掘削作業を開始する。平面プランが明瞭でなく、かつ竪穴建物群は遺構深度が浅いことがわかったため、サブトレンチを多用しながら順次検出、掘削を行う。
- 4月4日 1区北半までの遺構がほぼ確定する。
- 4月11日 1区南半の遺構検出を行う。黒色土が広く堆積していたため、サブトレンチを掘削し、遺構検出を行う。SD01・02・03より連続する溝を確認する。
- 4月13日 2区の遺構検出および掘削作業を開始する。SD07・SK07検出後、手作業によって遺構検出を複数回にわたって行ったが、その他の遺構は確認できなかった。
- 4月15日 3区の遺構検出および掘削作業を開始する。3区は礫層を地山とし、遺構覆土(SK02)も礫層由来のものであったため、色調のみによって遺構プランを検出することになった。
- 4月18日 遺構掘削作業完了。空撮準備を行う。
- 4月21日 空撮。
- 4月22日 住居跡・溝(SD04)の掘り方調査を開始。1区竪穴建物群周辺の黒色土を除去し、遺構・遺物の検出を行う。
- 4月26日 遺構測量作業終了。
- 4月27日 重機による埋め戻し作業開始。
- 4月28日 重機による埋め戻し作業終了。機材等撤収完了。現場作業が完了する。

IV 基本層序

I層はAs-A軽石を主体する耕作土層で、II層はAs-B軽石を主体する土層である。部分的にAs-B軽石の純堆積層(IV層)も確認されたが、耕作によると考えられる攪拌によって平面的な大きな広がり認められなかった。調査区の大半はII層直下から遺構検出面であるV層が確認されたが、1区北側を中心にその間にAs-B軽石を含む暗褐色土(III層)を挟む。遺構検出面のV層より上の土層は遺構覆土に包含されないことから、幾分遺構掘り込み面を削平した状況で堆積したものと想定される。そのため黒褐色土のV層は浅い堆積となるが、深度の浅い遺構は、その直下のローム層(VII層)を掘り込み底面としているため、ローム層上面を検出面とすると遺構が削平されてしまうので注意を要する。

なお3区ではII層直下より礫層が確認され、その上面が遺構検出面となる。



土層説明

- I. 暗褐色 10YR 粘性なし、しまり強。As-B、As-A 含む。表土層。
- II. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまり強。As-B、As-A 微量含む。
- III. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまり強。As-B 含む。1区北側に認められる。
- IV. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまりなし。As-B 多量含む。As-B 純層。
- V. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ 1.0mm 白色パミス微量含む。遺構検出面。
- VI. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、ロームブロック微量、焼土微量、炭化物微量含む。
- VII. 黒褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、ロームブロック、炭化物微量含む。
- VIII. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック少量、φ 1.0mm 白色パミス含む。ロームとの漸移層。
- IX-1. 黄褐色 5YR 粘性あり、しまりあり。ソフトローム。
- IX-2. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ローム層。
- X. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。砂粒含む。砂質を帯びる。

第4図 基本層序

V 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

地形の概要

調査地における地形はほぼ平坦を呈している。微地形をみると、本遺跡は帯状に北へ張り出す微高地上に位置し、その西側では鑛川に向かって段丘状に一段落ち、東側へは緩やかな傾斜をなす。本調査区は、その東側への緩斜面に面しており、南東方向へわずかに傾斜している。

調査区一部において地山礫層が基本土層Ⅱ層直下より確認されている。その広がりには3区全域から2区東半にかけて確認されており、北西から南東方向へ伸びているものと想定される。また1区SD04北側においては、ローム層下より礫層が確認された。

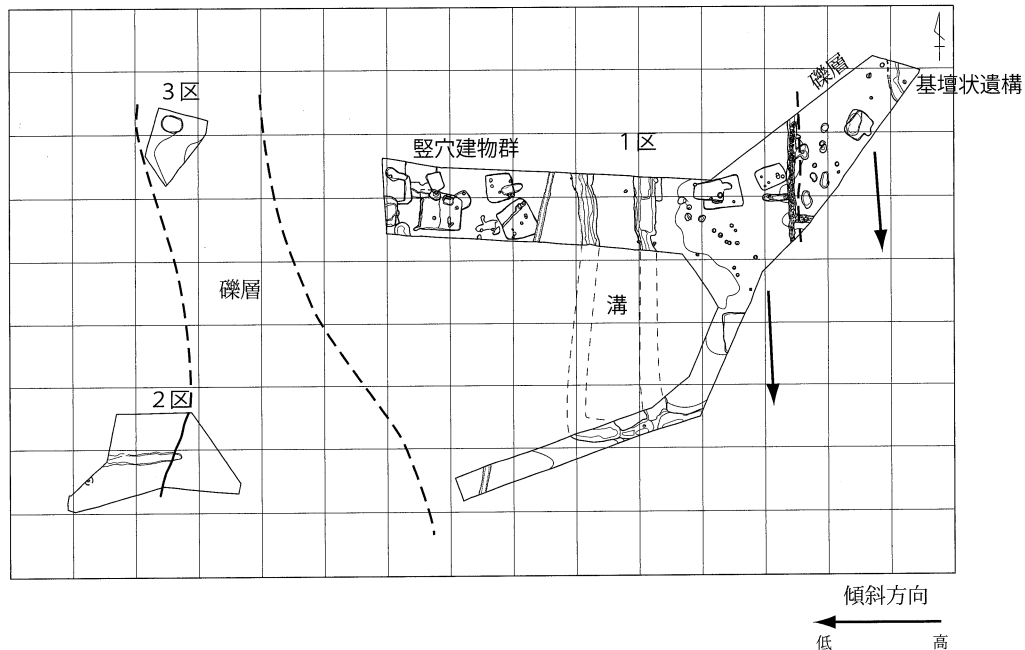
遺構の概要 (第5・6図)

遺構は竪穴建物跡 13 棟、基壇状遺構 1 基、溝 4 条、土坑 10 基、ピット 25 基が検出された。

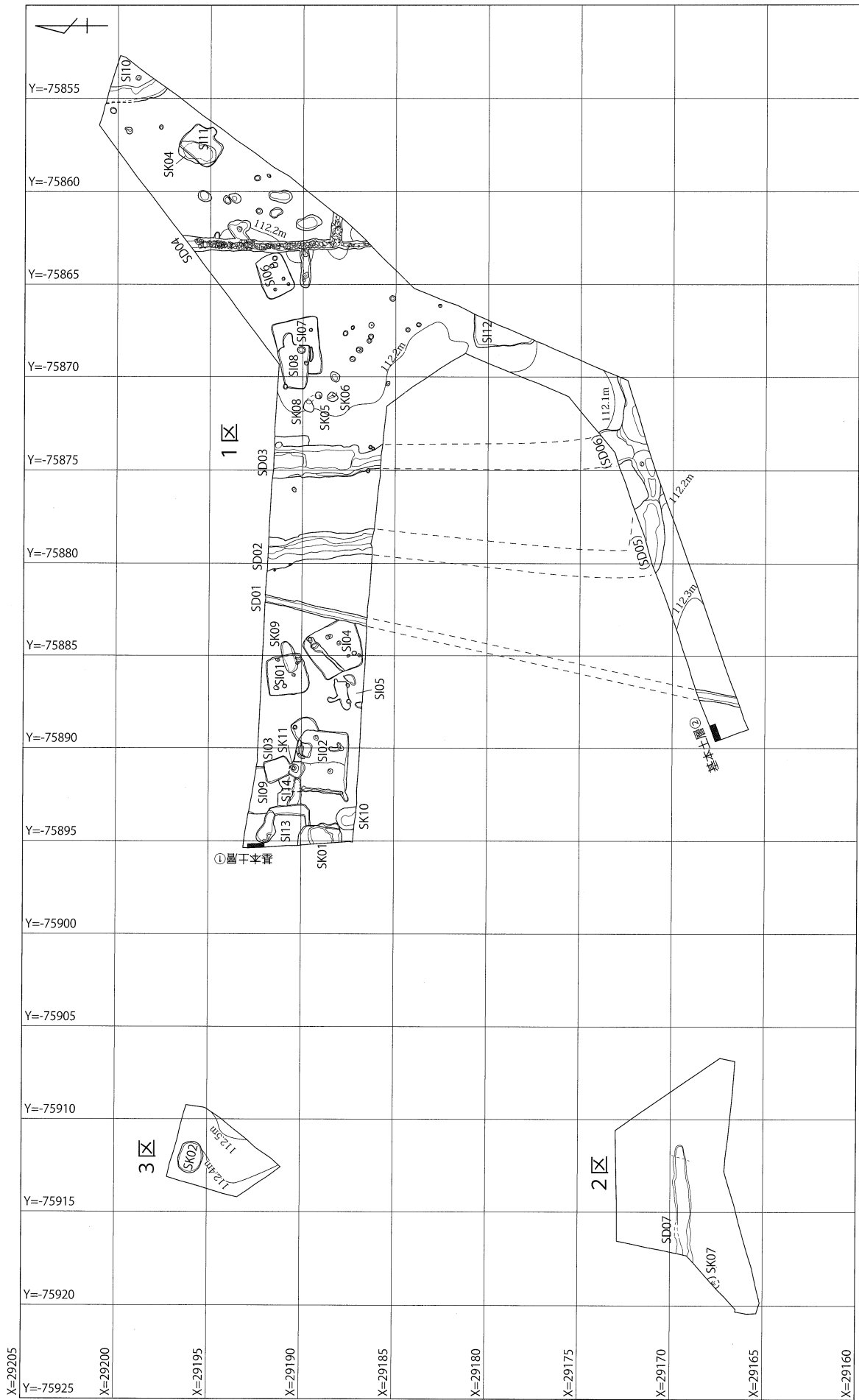
溝 2 条 SD-02・SD-03 が 1 区を南北に縦断するが、SD-02 は 1 区南において屈曲し、東方向へ走り、SD-03 はそれに接続する。それら SD02・03 の西側には深度の浅い竪穴建物群が展開する。

そして SD-02・03 の東側においては、深度は浅いものの竪穴壁面の直立する竪穴建物 (SI-08・SI-13) が散漫に分布する。またピットも集中して多く確認されたが、建物跡を構成する配列は見出せなかった。

1 区北東端は遺跡内において最も標高の高い位置にあたるが、そこからは基壇状遺構と想定される SI-10 が検出されている。



第5図 遺跡概要図



第6図 雑木味遺跡遺構全体図

2 竪穴建物跡

S I - 01 (第7図)

平面形態 方形 規模 南北 2.15 m×東西 2.11 m 主軸方位 N - 9° - W

遺構所見 竪穴状遺構。平面検出時のプランは不明瞭であったが、トレンチによる土層観察によってプランを確定した。竪穴内からはピットが5基検出されているが平面検出時のプランは明瞭であった。覆土にはロームを包含する暗褐色土が堆積していた。床面は地山ローム層を整形している。炉・カマド等の燃焼施設およびそれに由来する焼土は確認できなかった。

遺物所見 覆土中より少量の土器片が出土している。出土した遺物は、土師器片 18g である。図化に及んだ遺物はない。古代に帰属するものと想定される。

S I - 02 (第8・34図)

平面形態 方形 規模 南北 2.80 m×東西 3.27 m 主軸方位 S - 7° - W

遺構所見 竪穴状遺構。平面検出時のプランは明瞭であった。その他、住居内ピット、間仕切り溝、壁周溝のプランは明瞭に検出された。カマドは竪穴南西隅角で検出された。煙道部は竪穴外南西方向へ張り出すが、その平面プランは不鮮明であり、壁面もわずかな硬化しか認められなかった。煙道周辺には焼土・土器片を包含する黒色土が広がっていることから、煙道の平面プランは不確実な部分もある。なお床面被熱部分は竪穴南壁の方へ続いている。床面は地山ローム層を整形しているが、平坦ではなく西半分は一段下がっている。遺物所見 出土した遺物には、土師器片 1,350g・須恵器片 274g・瓦片 877g・土製品 11g がある。そのうち図化に及んだものは、カマド出土のものとして土師器片 1 点 (1)・須恵器片 1 点 (2)・不明土師器片 1 点 (5)・鋳型と想定される土製品 1 点 (3)・不明土製品 (瓦塔か) 1 点 (4) がある。覆土中出土遺物から泥面子 1 点 (6) を図化した。カマド出土遺物は 8 世紀代に位置づけられるものである。カマド内からは 3・4 の他、発泡した自然釉が付着した須恵器片 (2) が出土しており、狭義の住居跡とは異なる様相が看取される。

S I - 03 (第9・34・35図)

平面形態 方形 規模 南北 1.42 m×東西 1.20 m 主軸方位 S - 20° - E

遺構所見 竪穴状遺構。平面検出時のプランは比較的明瞭であった。床面南側において炭および焼土が広がっているが、その主体は西側にある。床面は地山ローム層を整形している。

遺物所見 出土した遺物には土師器片 204g・瓦片 5,438g があり、そのうち土師器片 1 点 (1)・土師器甕 1 点 (2)・瓦 3 点 (3・4・5) を図化した。瓦 (3) は床面直上から出土し、その直上から土師器片 (1) が出土している。この 2 点は SK-11 土坑の直近で出土しており、それとの関連性も想定される。出土遺物は、9 世紀後半に位置づけられる。

S I - 04 (第10図)

平面形態 方形 規模 南北 3.05 m×東西 2.60 m 主軸方位 N - 26° - W

遺構所見 竪穴状遺構。平面検出時のプランは不明瞭であった。覆土はロームを主体としており、掘り方が検出されている可能性が高い。竪穴底面は地山ローム層を成形している。竪穴内柱穴プランおよび溝状遺構

は明瞭に検出された。SD-01 と重複しており、SI-04 → SD-01 の先後関係が把握された。

遺物所見 出土した遺物は少量で、礫 415g (2点)にとどまる。

SI-05 (第11図)

平面形態 不明 規模 不明 主軸方位 不明

遺構所見 平面検出時のプランは明瞭であった。掘り方のみの残存と考えられる。炉およびカマド等の燃焼施設、およびそれに由来する焼土は検出されなかった。

遺物所見 出土した遺物はない。

SI-06 (第12図)

平面形態 長方形 規模 南北 1.64 m × 東西 2.28 m 主軸方位 N - 68° - E

遺構所見 竪穴建物跡。平面検出時のプランは不明瞭であった。貼床面が露出しておりその範囲をプランとした。炉およびカマド等の燃焼施設は検出されなかった。柱穴 (P-1) 覆土上層からは焼土・炭が検出された。

遺物所見 出土した遺物はない。

SI-07 (第13図)

平面形態 方形 規模 南北 2.30 m × 東西 3.10 m 主軸方位 N - 5° - E

遺構所見 竪穴状遺構。平面検出時のプランは不明瞭であった。床面は地山ローム層を整形している。炉・カマド等の燃焼施設およびそれに由来する焼土は検出されなかった。SI-08 号住と重複しており、SI-07 → SI-08 の先後関係が把握された。

遺物所見 出土した遺物は少量で、土師器片 5g・須恵器片 1g である。図化に及んだ遺物はない。

SI-08 (第13・35・36・37・38図)

平面形態 方形 規模 南北 1.75 m ~ 1.15 m × 東西 2.35 m (煙道部除く) 主軸方位 N - 7° - E

遺構所見 竪穴建物跡。平面検出時のプランは明瞭であった。カマドを東側に設けている。カマド覆土中からは焼土塊および炭が検出されたが、壁面の被熱は顕著ではなかった。また燃焼部分底面は瓦敷きとなっていたが、瓦自体の被熱は認められなかった。明確な柱穴は確認されていない。カマド右脇から貯蔵穴状の土坑が検出されたが、その深度は浅い。床面は地山ローム層を整形している。覆土は自然堆積と想定される。SI-07 号住と重複しており、SI-07 → SI-08 の先後関係が把握された。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 640g・須恵器片 141g・瓦片 11,441g があり、そのうち図化に及んだものは、須恵器環 1 点 (1)・土師器甕 2 点 (2・3)・瓦 9 点 (4・5・6・7・8・9・10・11・12) である。瓦はいずれも平瓦で、カマド底面に敷きつめられていた。出土した土器は、9 世紀後半に位置づけられる。

SI-09 (第14・38図)

平面形態 方形 規模 東西 2.54 m 主軸方位 S - 3° - E

遺構所見 竪穴建物跡。平面検出時のプランは明瞭であった。壁面は一部でしか残存を確認できなかったため、床面範囲でプランを確定した。南壁東寄り燃焼施設が確認され、炭および焼土塊が検出された。炭は

5 cm大の大形のもものがまとまって出土している。床面は地山ローム層を整形している。覆土は自然埋没と想定されるが、浅い堅穴のため短期間に埋没した状況が想定される。SI-03・SI-14 と重複しており、SI-14 → SI-09 → SI-03 の先後関係が把握された。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 218g・須恵器片 121g・瓦片 1,608g・土製品 176g・礫 621g（1点）があり、そのうち須恵器蓋 1点（1）・土師器坏 2点（2・3）・瓦 2点（4・5）を図化した。瓦は覆土中より出土している。出土した土器は 9 世紀後半に位置づけられる。

SI-11（第 15・39 図）

平面形態 長方形 規模 北西-南東 1.65 m（煙道除く）×北東-南西 2.15 m 主軸方位 S-55°-E

遺構所見 堅穴建物跡。平面検出時のプランは明瞭であった。床面は確認できず、堅穴底面からは礫層由来の小礫が広がっていたことから、掘り方のみが残存しているものと判断される。それら小礫は壁際を中心に部分的に認められることから掘り方埋土として用いられた可能性が考えられる。南東壁中央にはカマド煙道状の張り出しが認められ、被熱を受けた礫が検出された。下層からは SK-04 が検出されているが、掘り込み上端が大きくずれることから、本遺構とは関連しないと判断される。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 72g・須恵器片 380g あり、そのうち須恵器蓋 1点（1）を図化した。（1）は、堅穴外側より出土している。8 世紀後半に位置づけられる。

SI-12（第 16・39 図）

平面形態 方形 規模 南北 1.6 m 主軸方位 真北

遺構所見 堅穴建物跡。平面検出時のプランは明瞭であった。床面からは建物上屋部材と想定される炭化材が検出された。炉・カマド等の燃焼施設は確認されなかった。床面は地山ローム層による硬化面が確認された。覆土は自然埋没と想定される。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 47g・須恵器片 80g があり、そのうち須恵器甕 1点（1）・不明須恵器片 1点（2）を図化した。古代に位置づけられる。

SI-13（第 17・39 図）

平面形態 方形 規模 南北 2.9 m 主軸方位 真北か

遺構所見 建物構造は不明である。方形をえがく溝が検出された。堅穴掘り込みは確認されず、損失したか、本来になかった可能性が考えられる。周溝北西端部は土坑状に深く掘り込まれ、掘り込み中位が一部柱痕が想定される形状をなす。炉・カマド等の燃焼施設は確認されなかった。床面は地山ローム層で成形されている。SK-01 号土坑と重複しているが、明確な切り合い関係は把握できなかった。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 126g・須恵器片 400g・瓦 35g・礫 55g（1点）あり、そのうち須恵器坏 1点（1）を図化した。10 世紀代に位置づけられるか。

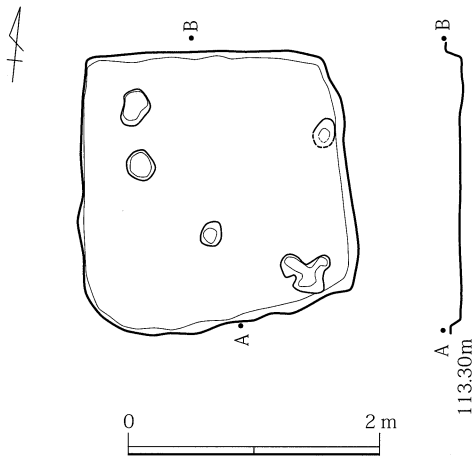
SI-14（第 18・39 図）

平面形態 不明 規模 不明 主軸方位 不明

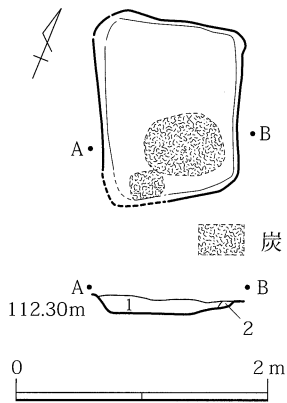
遺構所見 掘り方のみが検出されたものと想定される。南側の立ち上がりが東西にまっすぐ走ることから南壁際の掘り込みと判断され、本来の堅穴は北側へ広がるものと想定される。炉・カマド等の燃焼施設および

それに伴う焼土は検出されなかった。SI-02 と SI-13 と重複しており、SI-14 → SI-13 の先後関係が把握された。SI-02 との先後関係については明確には把握できなかった。

遺物所見 出土した遺物には、土師器片 71g・須恵器片 238g があり、そのうち土師器坏 1 点(1)を図化した。7 世紀後半に位置づけられる。



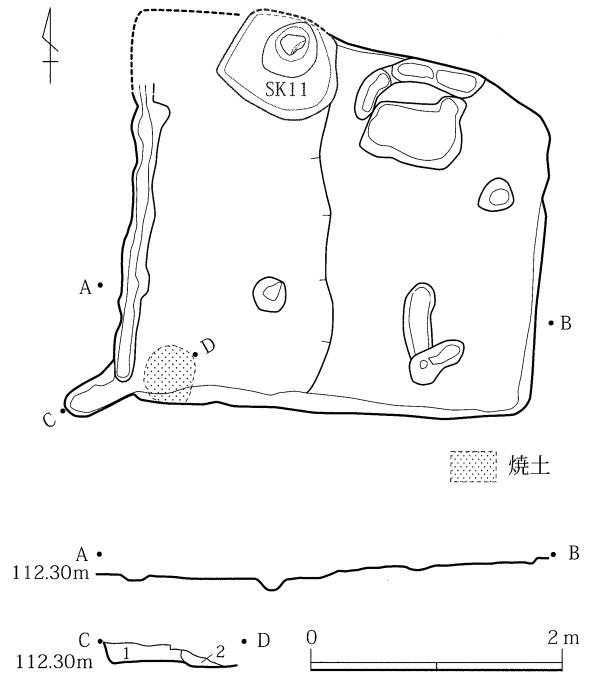
第7図 SI-01



土層説明

1. 黒褐色土 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、焼土少量、炭化物含む。
2. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量含む。

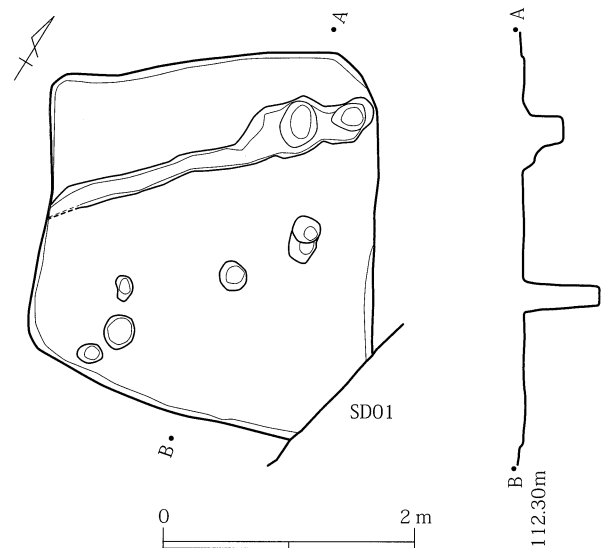
第9図 SI-03



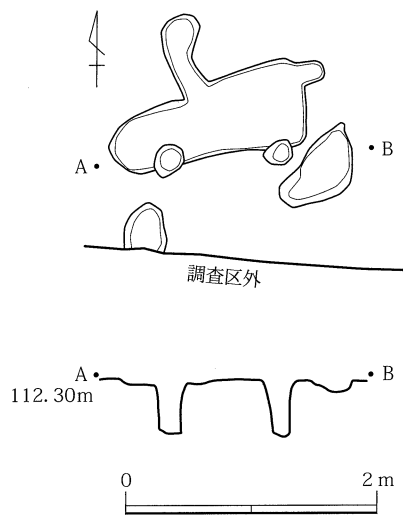
C-D土層説明

1. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、焼土、炭化物含む。
2. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、焼土微量含む。炭化物微量含む。

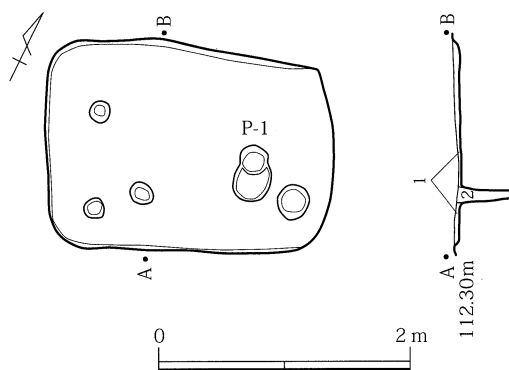
第8図 SI-02



第10図 SI-04



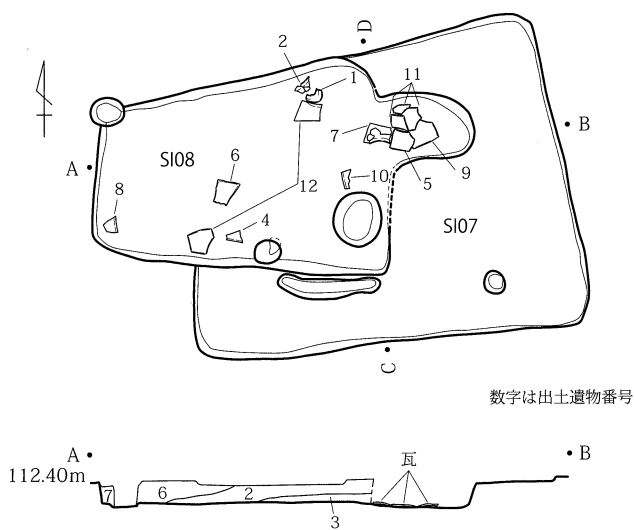
第11図 SI-05



土層説明

1. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまり強。礫、白色粒子含む。貼床。
2. ビット覆土。

第12図 SI-06

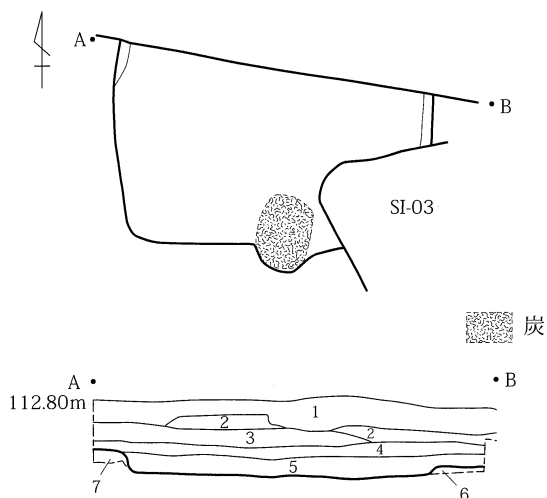


数字は出土遺物番号

土層説明

1. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、白色パミス含む。SI07 覆土。
2. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、As-B 微量含む。SI07 覆土。
3. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量、白色パミス微量含む。SI08 覆土。
4. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、白色パミス微量含む。SI08 覆土。
5. 暗褐色 7.5YR 粘性強、しまり強。白色パミス微量含む。シルト質。SI08 覆土。
6. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック、As-B 微量含む。SI08 覆土。
7. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック少量、白色パミス含む。SI08 覆土。

第13図 SI-07・08

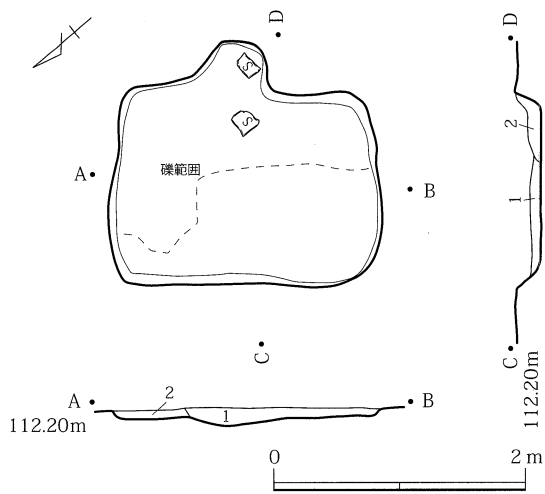


土層説明

1. 基本土層 I 層。
2. 基本土層 II 層。
3. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまりあり。As-B 多量、焼土少量含む。
4. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ1.0mm 白色パミス少量含む。
5. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック少量、焼土微量、炭化物微量、φ1.0mm 白色パミス微量含む。
6. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量含む。地山ローム層。
7. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック含む。壁面。

炭

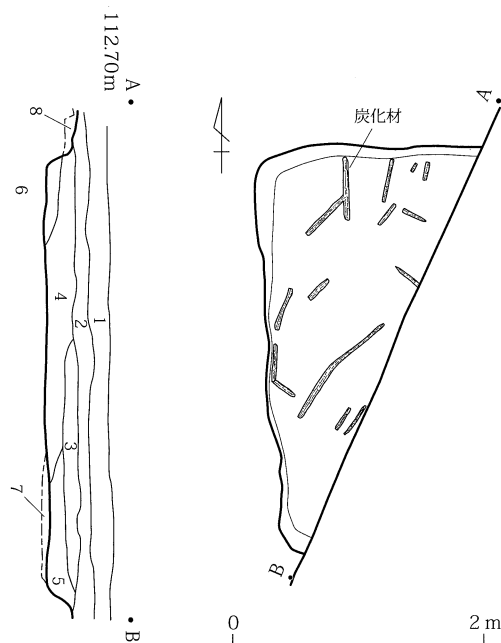
第14図 SI-09



土層説明

1. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、 ϕ 1.0mm 白色パミス微量 小礫微量含む。
2. 黒褐色 10YR 粘性ややあり、しまりあり。 ϕ 2.0cm 礫含む。

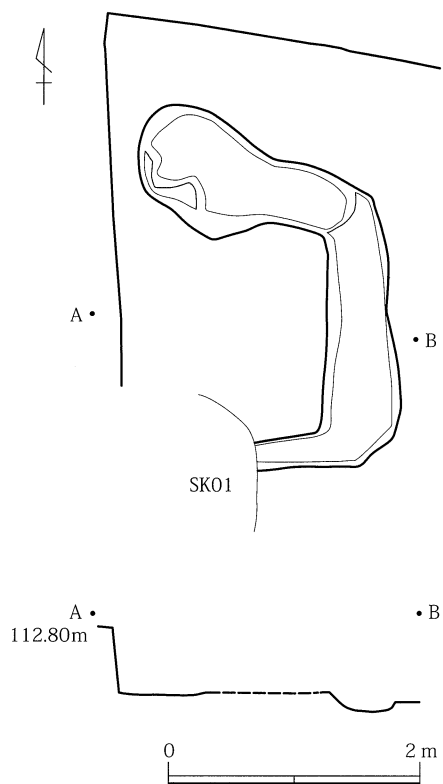
第 15 図 S I - 11



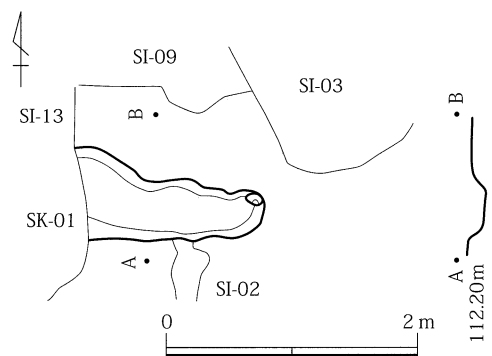
土層説明

1. 基本土層 I 層。
2. 基本土層 II 層。
3. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック少量、 ϕ 1.0mm 白色パミス含む。
4. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量、炭化物少量含む。
5. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、炭化物少量含む。
6. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、炭化物少量含む。
7. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。床面。
8. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。地山層。

第 16 図 S I - 12



第 17 図 S I - 13



第 18 図 S I - 14

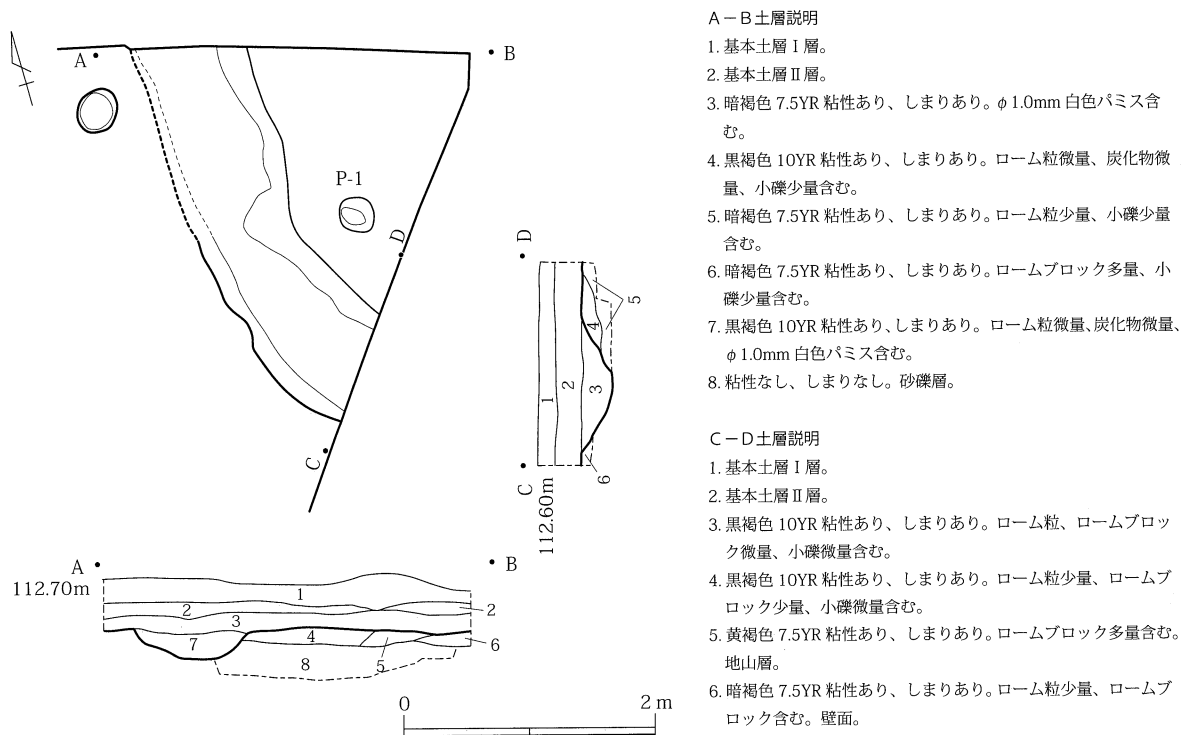
3 基壇状遺構

S I - 10 (第 19・39 図)

平面形態 方形か 規模 溝幅 1.4 m ~ 0.9 m 主軸方位 不明

遺構所見 周溝部分が検出され、内法にわずかな屈曲部分が認められるためその平面形態は方形が想定される。平面検出プランは明瞭であったが、周溝外法部分は、不明瞭な部分があった。周溝は外法は緩やかな掘り込みをもち、内法は急激に立ち上がる。基壇部分は明確な硬化面は成していなかったが土層観察によって、地山礫層を削り出した後、暗褐色土を盛土状に内側から施していった状況が認められた。基壇上の P-1 覆土には As-B 軽石を包含していた。

遺物所見 遺物はいずれも周溝覆土内より出土している。出土した遺物には、土師器片 116g・須恵器片 94g・瓦 1,330g がある。そのうち図化に及んだものは、須恵器坏 1 点 (1)・土師器甕 1 点 (2)・丸瓦 1 点 (3) である。出土した土器は、9 世紀前半に位置づけられる。



第 19 図 S I - 10

4 溝

SD-01 (第20図)

規模 幅 0.50 m 深さ 0.62 m

遺構所見 暗渠。北東から南西方向に向かってまっすぐ伸びる。ほぼまっすぐに掘り込まれ、底面には竹が数本埋設されている。基本土層Ⅱ層より掘り込まれており、他の遺構より新しいものである。掘削時期については不明である。

遺物所見 出土した遺物は陶磁器片 13g である。そのうち図化に及んだものは、陶器皿 1 点 (1) である。

SD-02 (第21・23・39・40図)

規模 幅 1.50 m 深さ 0.70 m

遺構所見 南北にほぼまっすぐ走り、1区南側において東方向へ屈曲する。断面形態は上方が大きく開き、下位に至ってまっすぐ掘り込まれる漏斗状を呈する。長軸約 2.5 m の長楕円形の土坑を連続させることによって掘削している。それら作業単位としての土坑の接続部分は深度が浅くなる。1区南側では SD-03 号溝と接続するが、土層堆積状況より掘削時期は SD-02 → SD-03 の先後関係が把握された。覆土からは流水の痕跡は認められず、自然堆積によって埋没したと想定される。

遺物所見 いずれも覆土中より出土している。散漫な分布状況を呈しており、集中的に廃棄されたような状況は認められなかった。出土した遺物には、土師器片 224g・須恵器片 99g・瓦 8,583g・礫 689g (1点) がある。そのうち図化に及んだものは、須恵器環 1 点 (1)・軒丸瓦 1 点 (5)・丸瓦 2 点 (2・4)・平瓦 1 点 (3) である。軒丸瓦 (5) は、複弁六葉蓮華文と想定され、南側部分 (調査時 SD-05) の覆土中より出土している。出土した須恵器環 (1) は 9 世紀代に位置づけられる。

備考 本溝の 1 区南側部分は調査時には SD-05 と呼称している。

SD-03 (第22・23・41図)

規模 幅 2.15 m～1.0 m 深さ 0.36 m

遺構所見 SD-02 号溝とほぼ平行して南北に走り、1区南側において屈曲する SD-02 号溝に接続する。1区北側部分は幅広で、東側にテラス状の掘り込みを有する断面幅広の台形状を呈する。その南側は一段落ち込み、その断面形態は台形を呈する。その幅員が変わる箇所付近には両側にピットが掘り込まれている。覆土からは流水の痕跡は認められず、自然堆積によって埋没したと想定される。SD-02 → SD-03 の掘削時期の先後関係が把握された。

遺物所見 いずれも覆土中より出土している。散漫な分布状況を呈しており、集中的に廃棄されたような状況は認められなかった。出土した遺物には、土師器片 290g・須恵器片 67g・瓦 2,066g・礫 832g (3点) あり、そのうち須恵器環 1 点 (1)・軒丸瓦 1 点 (2)・平瓦 1 点 (3) を図化した。軒丸瓦 (1) は覆土中より出土しているが、瓦当文様は不明である。

備考 本溝の 1 区南側部分は調査時には SD-06 と呼称している。

SD-04 (第25図)

規模 幅 0.60 m 深さ 0.31 m

遺構所見 暗渠状遺構。南北にまっすぐ伸び、東へ屈曲する。東へ屈曲した延長線上は現在の地割と合致する。一部枝状に分岐するものが認められるが、その深度は浅い。掘り込み内には礫を充填するが、土坑状の掘り込みを連続させ、その各土坑両端に大形の礫を設置し、その中を小形の円礫で充填する方法を採っている。溝の機能については不明である。溝の両側をトレンチによって断ち割ったが、いずれも自然堆積層で造成の形跡は認められなかった。掘り込みは基本土層第Ⅲ層より掘り込まれているが、溝の上層にはⅡ層が明瞭に被覆する状況は認められなかった。

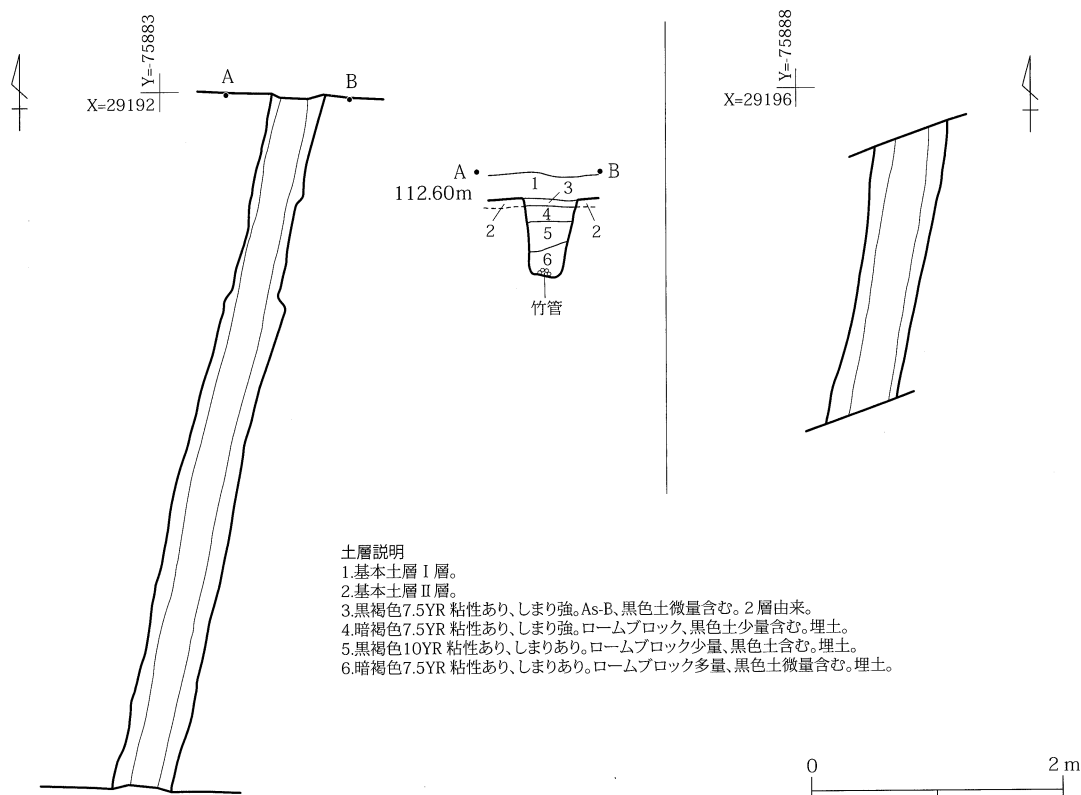
遺物所見 本遺構に伴う遺物は出土していない。出土した遺物は、土師器片 31g・瓦 435g で、図化に及んだものはない。

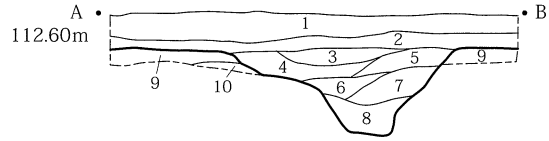
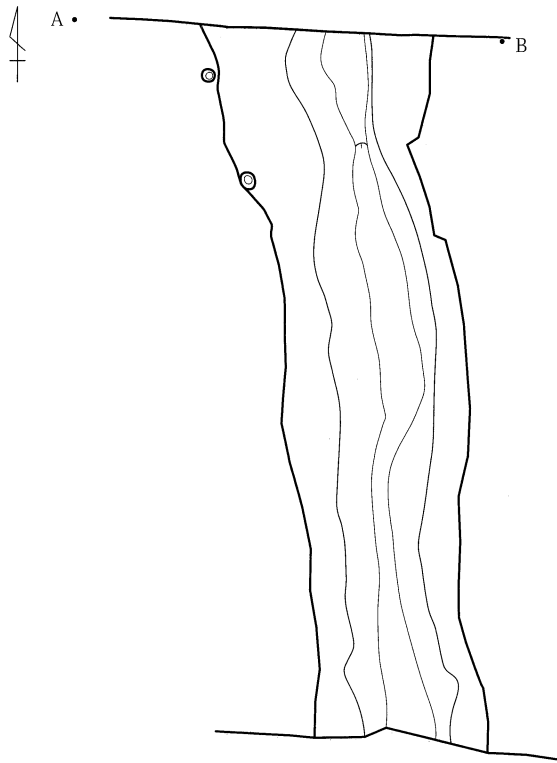
SD-07 (第24図)

規模 幅 0.9 m 深さ 0.21 m

遺構所見 東西にまっすぐ走り、東側の地山礫層に至って収束する。断面形態は逆かまぼこ形を呈しており、凹凸のある底面をなしている。覆土からは流水の痕跡は認められず、自然堆積によって埋没したと想定される。

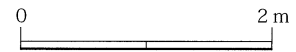
遺物所見 本遺構に明確に伴うと想定される遺物は出土していない。出土した遺物は、土師器 88g・須恵器 90g・瓦 89g あるが、図化に及んだ遺物はない。



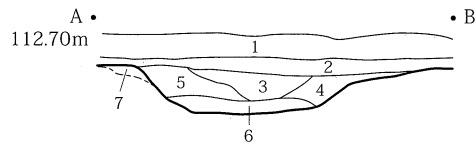
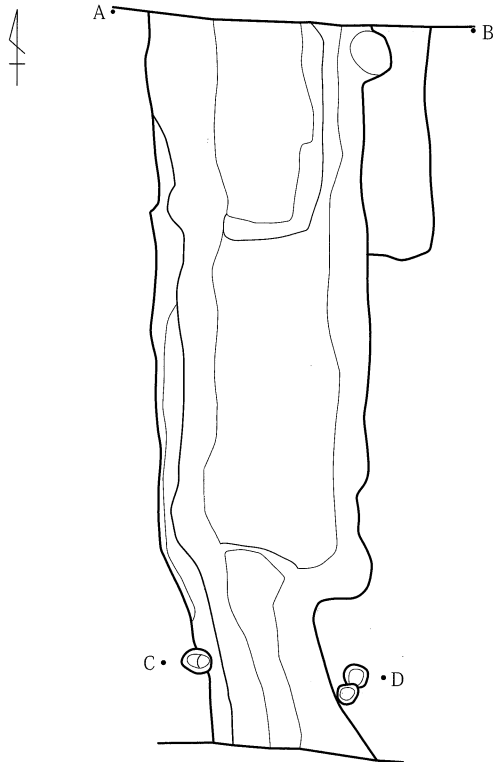


土層説明

- 1.基本土層 I 層。
- 2.基本土層 II 層。
- 3.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B微量含む。
- 4.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、炭化物微量含む。
- 5.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B微量、焼土微量含む。
- 6.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、 ϕ 1.0mm 白色パミス含む。
- 7.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック少量、 ϕ 1.0mm 白色パミス少量含む。
- 8.黒褐色 10YR 粘性強、しまりあり。ロームブロック少量含む。
- 9.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、 ϕ 1.0mm 白色パミス微量含む。
- 10.黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量含む。ローム層。



第 21 図 SD-02 (北側)

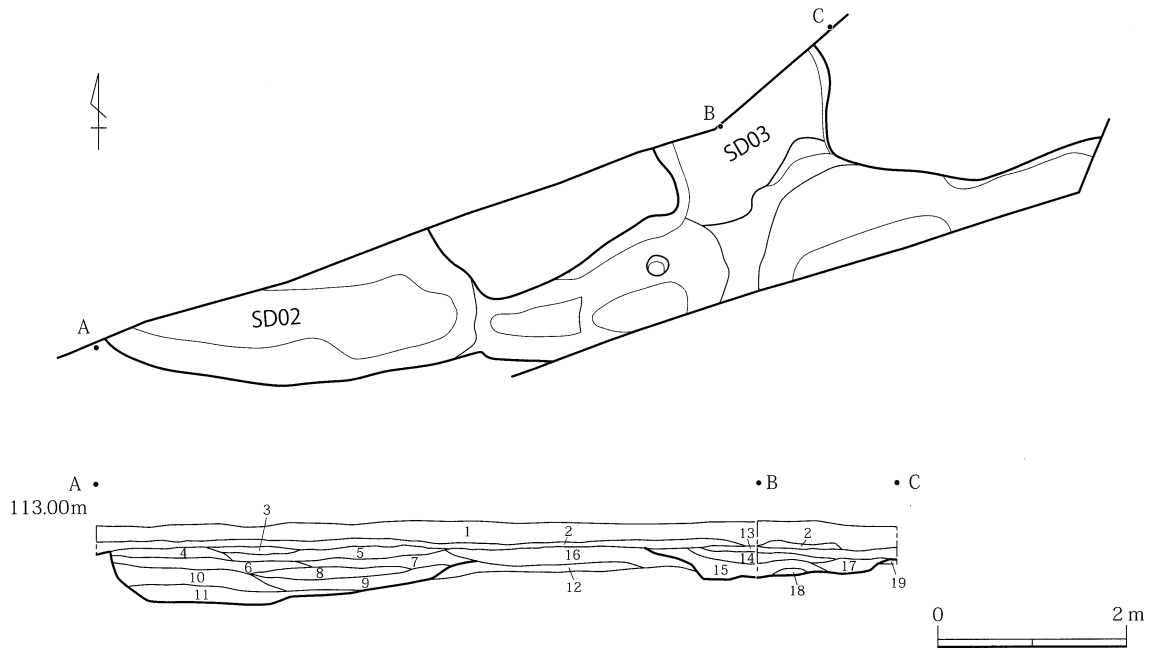


土層説明

- 1.基本土層 I 層。
- 2.基本土層 II 層。
- 3.暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒含む。
- 4.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、 ϕ 1.0cm 小礫微量含む。
- 5.暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。 ϕ 1.0mm 白色パミス少量含む。
- 6.黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量含む。
- 7.暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。炭化物微量含む。壁面。



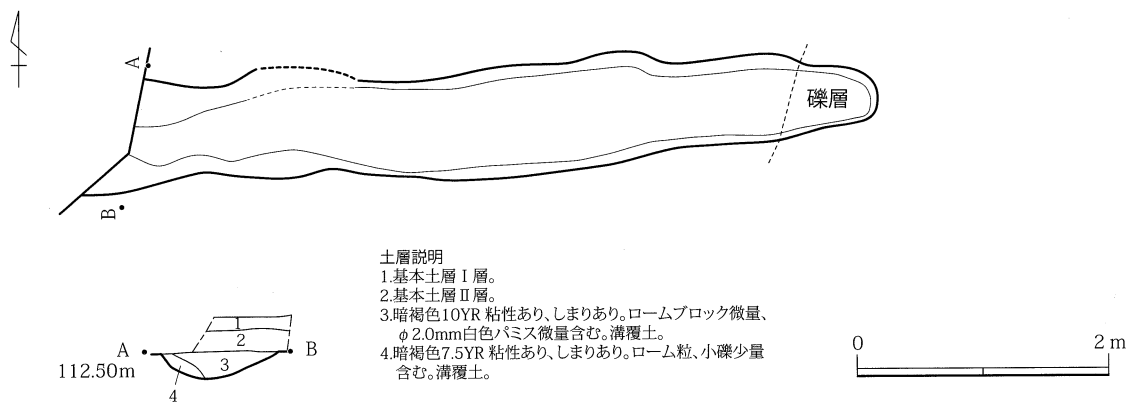
第 22 図 SD-03 (北側)



土層説明

1. 基本土層Ⅰ層。
2. 基本土層Ⅱ層。
3. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-B 含む。As-B 純層由来。SD02 覆土。
4. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ 1.0mm 白色パミス少量含む。SD02 覆土。
5. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ 5.0mm 白色パミス少量含む。SD02 覆土。
6. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、φ 5.0mm 白色パミス少量含む。SD02 覆土。
7. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、φ 2.0mm 白色パミス微量含む。SD02 覆土。
8. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量、φ 5.0mm 白色パミス微量含む。SD02 覆土。
9. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック、黒色土少量含む。SD02 覆土。
10. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック、小礫微量含む。SD02 覆土。
11. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量、小礫微量含む。ローム由来の砂質を帯びる。
12. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量含む。ローム 2 次堆積か。
13. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-B 少量含む。SD03 覆土。
14. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、φ 1.0mm 白色パミス少量含む。SD03 覆土。
15. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、φ 2.0mm 白色パミス含む。SD03 覆土。
16. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ローム粒、ロームブロック少量、φ 5.0mm 白色パミス含む。
17. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ 7.0mm 白色パミス含む。
18. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量含む。12 層に類似。
19. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック含む。基本土層 2-IV 層に類似。

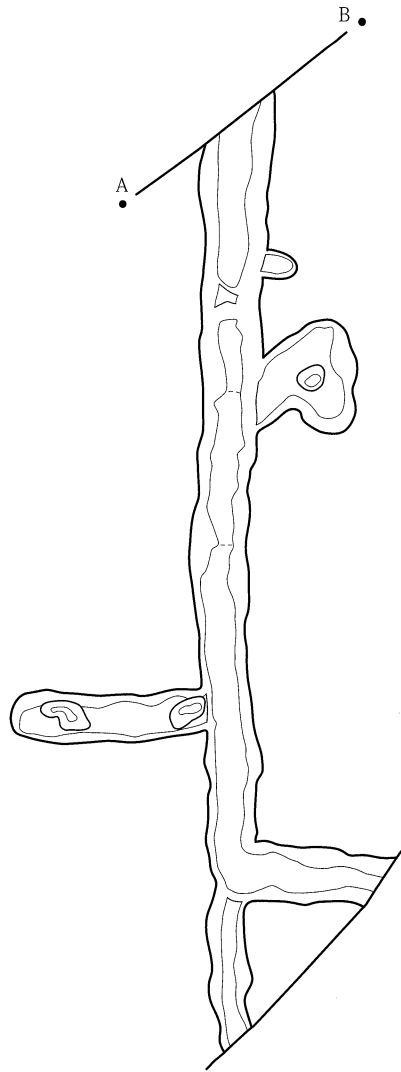
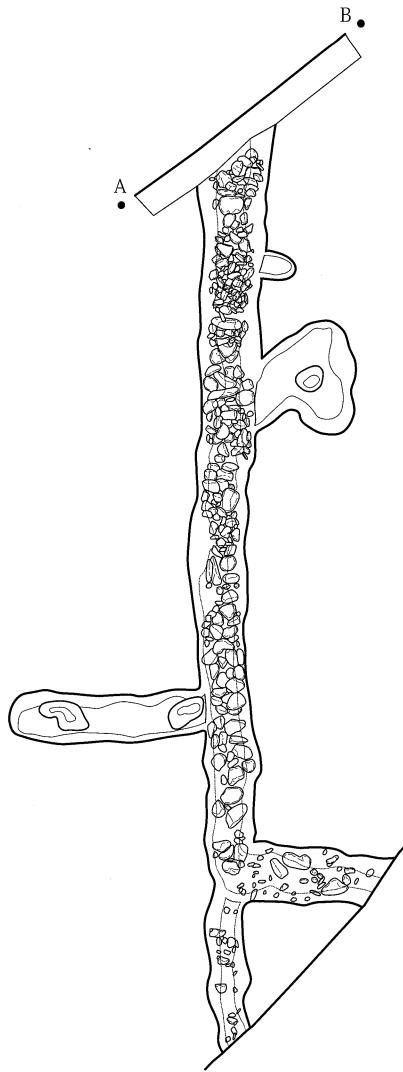
第 23 図 SD-02・03 (南側)



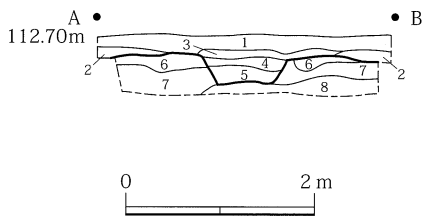
土層説明

1. 基本土層Ⅰ層。
2. 基本土層Ⅱ層。
3. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量、φ 2.0mm 白色パミス微量含む。溝覆土。
4. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、小礫少量含む。溝覆土。

第 24 図 SD-07



掘り方



土層説明

1. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりなし。As-B、As-A 含む。基本土層 I 層。
2. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまりあり。As-B、As-A 微量含む。基本土層 II 層。
3. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまりややあり。As-B、As-A 微量含む。基本土層 II 層に由来。
4. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-B 含む。溝埋土。
5. 黒褐色 10YR As-B、礫多量含む。溝埋土。
6. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。φ5.0mm 小礫少量含む。地山。
7. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、φ1.0mm 白色パミス少量含む。地山。
8. 黒褐色 10YR 粘性なし、しまりなし。地山礫層。

第 25 図 S D - 04

5 土坑

S K - 01 (第 26・41 図)

形態 隅丸方形 規模 南北 2.35 m 深さ 0.48 m

遺構所見 人為的掘り込みと想定されるが、その底面は凹凸をなす。覆土は自然堆積による埋没土と想定される。

遺物所見 覆土上層より土師器坏・甕が出土している。出土した遺物には、土師器片 1,373g・須恵器片 614g・瓦 708g あり、そのうち土師器坏 2 点 (1・2)・土師器鉢 1 点 (3) を図化した。出土した遺物は、8 世紀代に位置づけられる。

S K - 02 (第 27 図)

形態 楕円形 規模 長軸 1.71 m×短軸 1.26 m 深さ 0.56 m

遺構所見 地山礫層を掘り込んでおり、覆土中にも礫層が堆積する。人為的掘り込みと判断されるが、覆土中に稲の植物根が多く包含しており、近年のものと判断される。SI-11 と重複しており、土層観察から SK-04 → SI-11 の先後関係が把握された。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 04 (第 27 図)

形態 楕円形 規模 長軸 2.02 m×短軸 1.05 m 深さ 0.33 m

遺構所見 地山礫層を掘り込んでいる。覆土には砂質を帯びるローム層が均一に入っており、短期間に埋没した状況が想定される。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 05 (第 28 図)

形態 円形 規模 直径 0.38 m 深さ 0.74 m

遺構所見 上端から北方向へ斜位に掘り込まれ、底面付近において SK-08 と接続する。覆土には黒褐色土が認められた。明確な建物跡は想定できなかった。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 06 (第 29 図)

形態 円形 規模 直径 0.50 m 深さ 0.80 m

遺構所見 上端から南東方向へやや斜位に掘り込まれるが、その傾斜は SK-05・SK-08 と比べるとその立ち上がりは緩やかである。明確な建物跡は想定できなかった。

遺物所見 出土した遺物は、土師器片 1g・須恵器片 17g あり、図化に及んだ遺物はない。

S K - 07 (第 30 図)

形態 円形 規模 長軸 0.55 m 0.68 m

遺構所見 断面形態は逆台形状を呈する。柱痕は確認できなかったが、覆土は均質で人為的埋没の可能性が

想定される。2区西端部で検出されており、明確な建物跡は想定できなかった。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 08 (第29図)

形態 円形 規模 長軸 0.70 m 深さ 0.70 m

遺構所見 上端から東方向へ斜位に掘り込まれ、底付近でSK-05と接続する。覆土には黒褐色土が認められた。明確な建物跡は想定できなかった。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 09 (第31図)

形態 楕円形 規模 長軸 1.70 m×短軸 0.70 m 深さ 0.39 m

遺構所見 ローム層下、礫層から掘り込まれている。覆土には礫層由来の多量の礫層を包含する。覆土は均質で短期間に埋没した状況が想定される。SI-01と重複するが、その掘り込み土層の違いからSK-09→SI-01の先後関係が認められる。

遺物所見 遺物は出土していない。

S K - 10 (第32・42図)

形態 円形 規模 直径 1.20 m 深さ 0.21 m

遺構所見 掘り込みの立ち上がりは緩やかで、その断面形態は播鉢状を呈する。底面は地山ローム層であるが、土坑周囲も不規則な凹凸が認められる。覆土には焼土・炭を包含しているが、土坑周囲からも焼土・炭が検出されている。

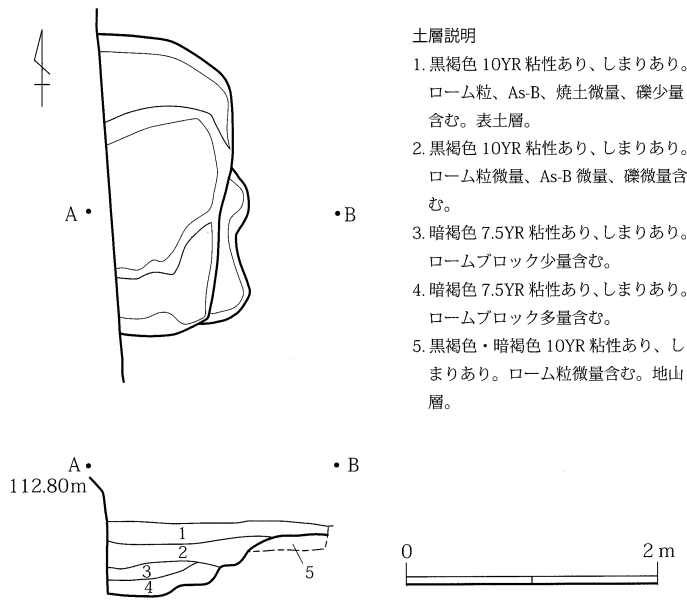
遺物所見 出土した遺物は、土師器片 362g・須恵器片 322g・瓦 958g・土製品 172gあり、そのうち土師器坏 1点(1)・須恵器坏 1点(2)・丸瓦 1点(3)を図化した。1・2は土坑底面より出土している。出土した遺物は、10世紀に位置づけられる。

S K - 11 (第32・42図)

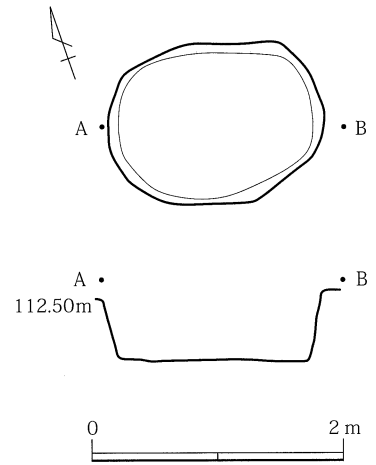
形態 方形 規模 長軸 0.94 m×短軸 0.80 m 深さ 0.36 m

遺構所見 当初SI-02に付随する遺構として調査を行ったが、SI02との出土遺物に時期差が認められることから別遺構と判断した。上面から方形に掘り込まれ、中央部分で円形に一段掘り下げられる。

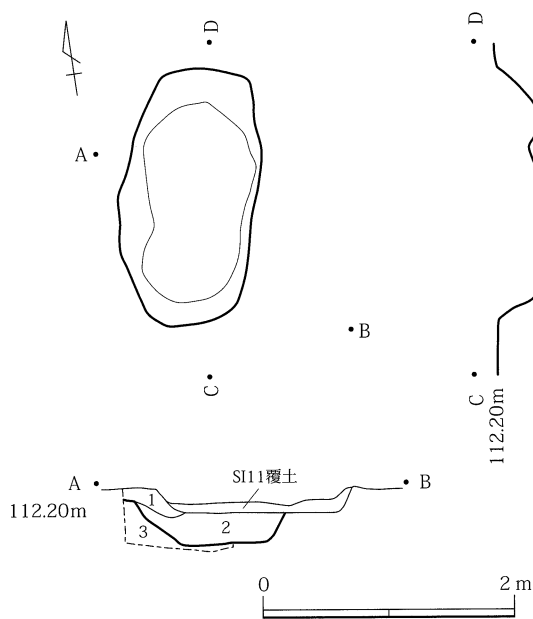
遺物所見 遺物は底面より良好な状態で出土している。出土した遺物には、土師器片 166g・須恵器片・瓦片 81g・礫 2,635g(1点)がある。そのうち図化に及んだ遺物は、土師器坏 1点(1)・須恵器坏 1点(2)・土師器甕 2点(3・4)である。出土した遺物は、9世紀後半に位置づけられる。



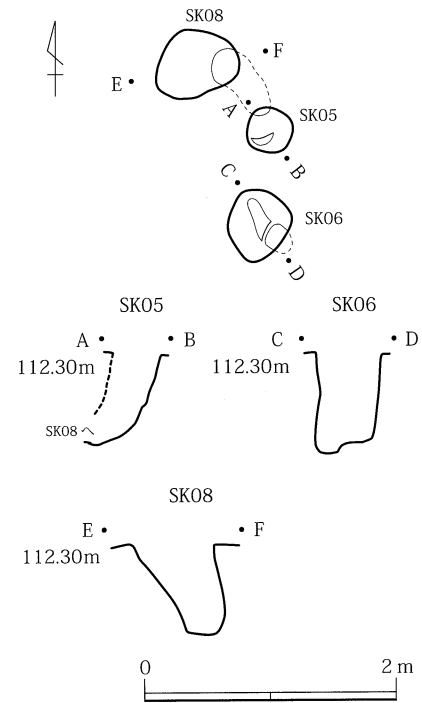
第 26 図 SK-01



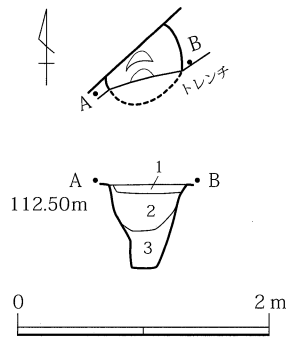
第 27 図 SK-02



第 28 図 SK-04



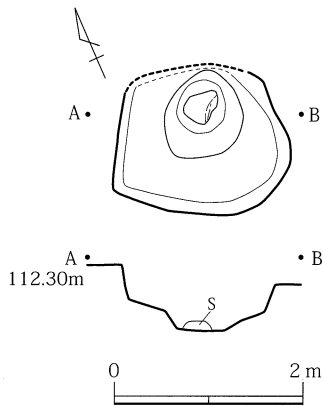
第 29 図 SK-05・06・08



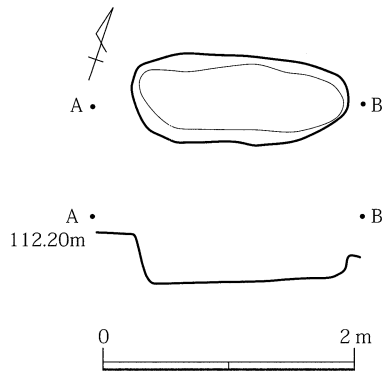
土層説明

1. 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック含む。
2. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ローム粒少量、φ 1.0mm 白色パミス微量含む。
3. 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロックを主体とする。

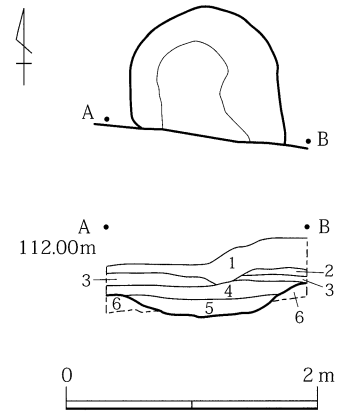
第 30 図 SK-07



第 33 図 SK-11



第 31 図 SK-09



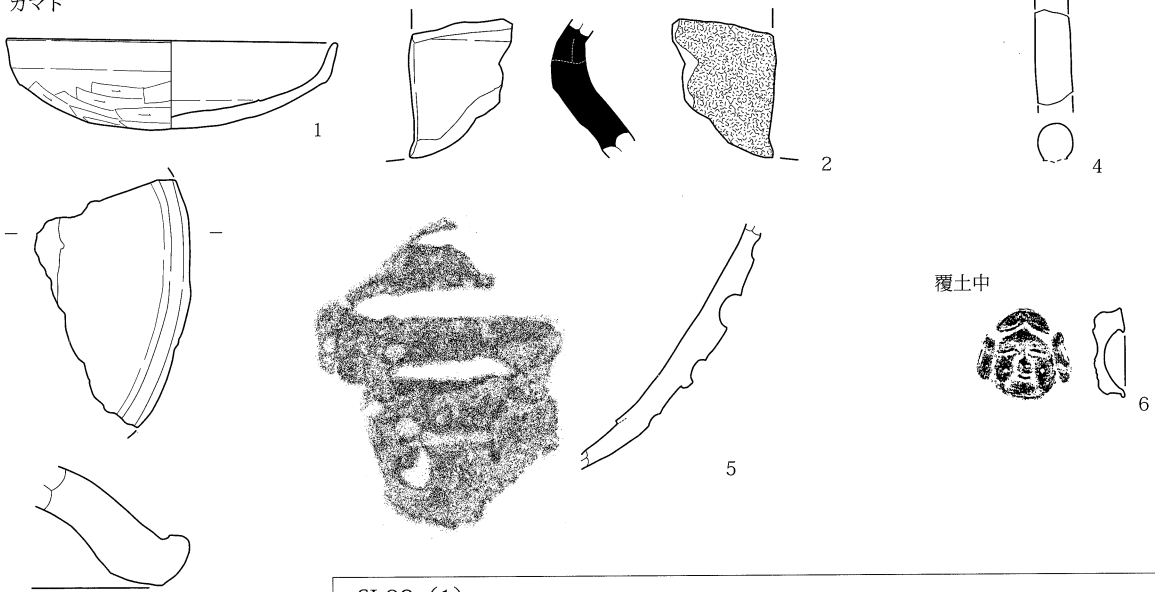
土層説明

1. 基本土層 1 層。
2. 暗褐色 7.5YR 粘性なし、しまりなし。As-B 多量含む。As-B 純層。
3. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B 少量含む。
4. 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。焼土微量、炭化物少量、小礫微量含む。
5. 黒褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量、炭化物微量、小礫少量含む。
6. 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック、小礫微量含む。壁面。

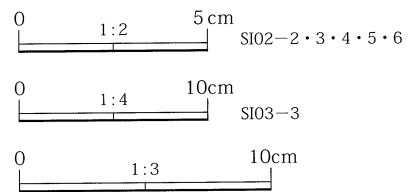
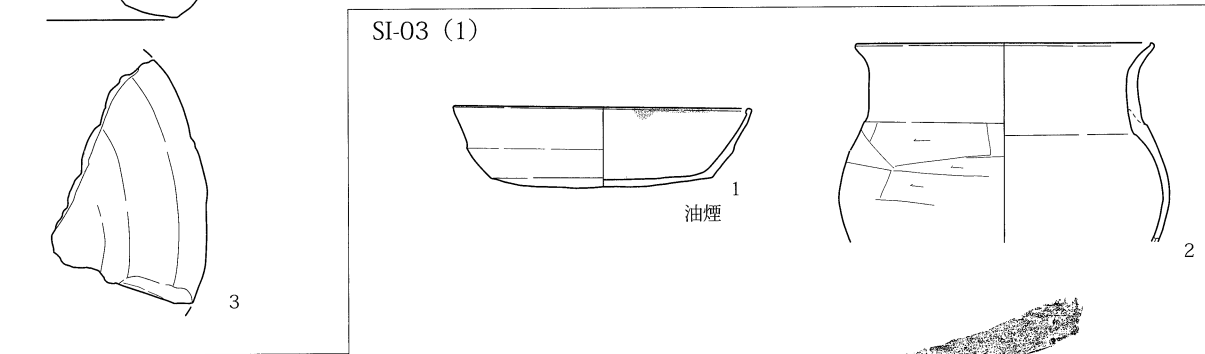
第 32 図 SK-10

SI-02

カマド

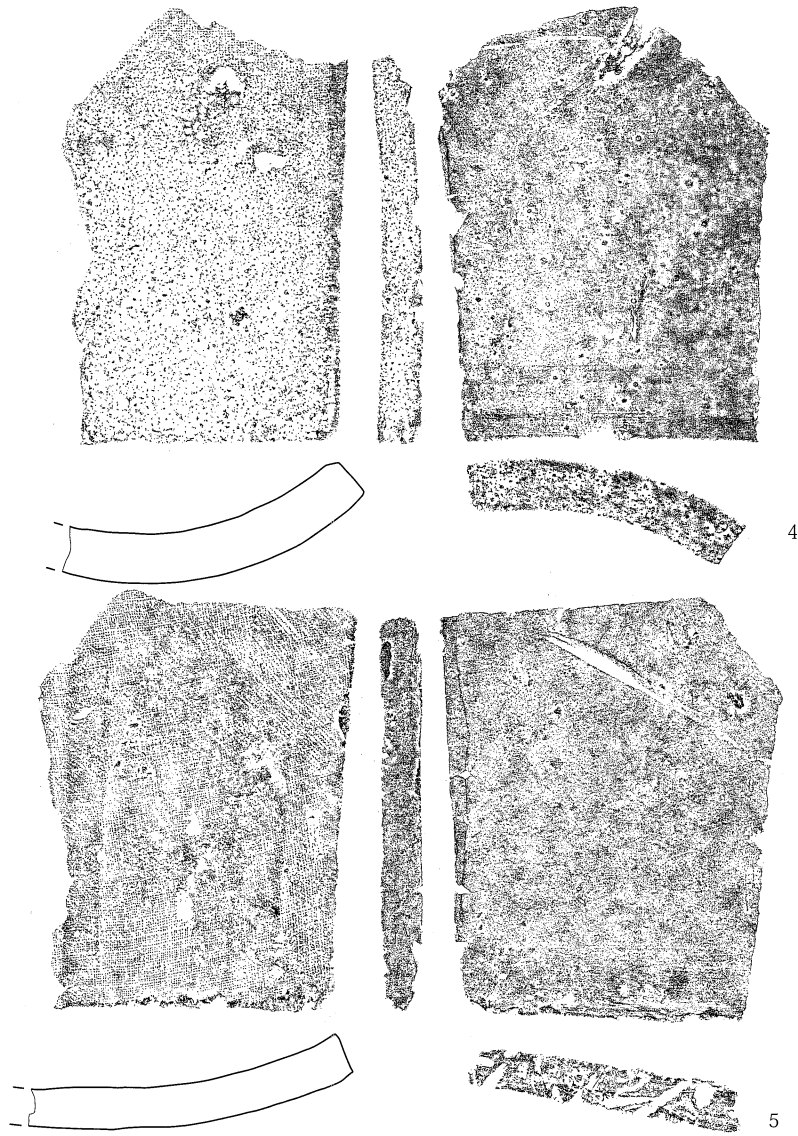


SI-03 (1)

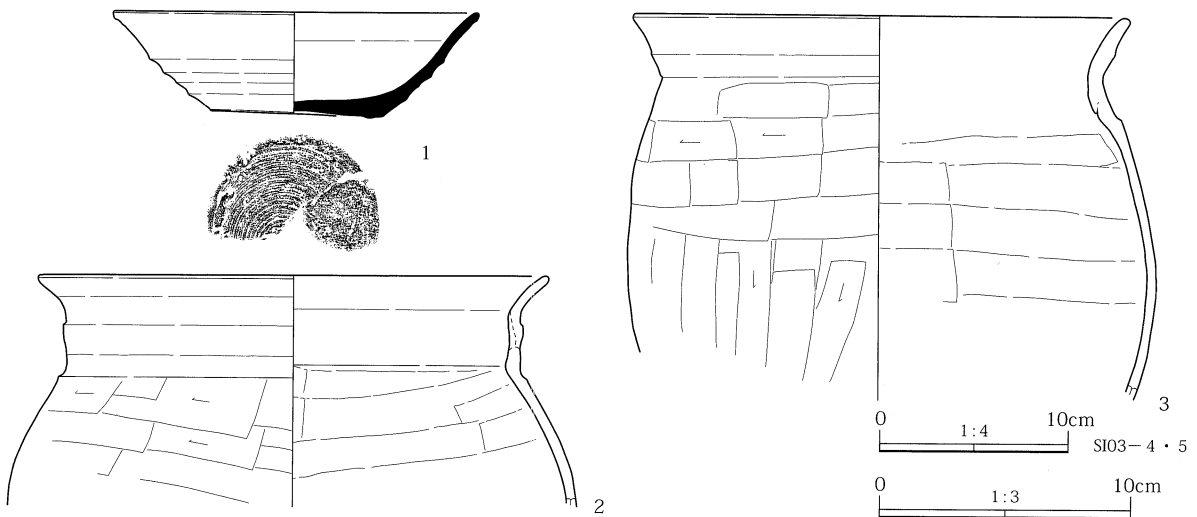


第 34 図 出土遺物実測図 (1)

SI-03 (2)

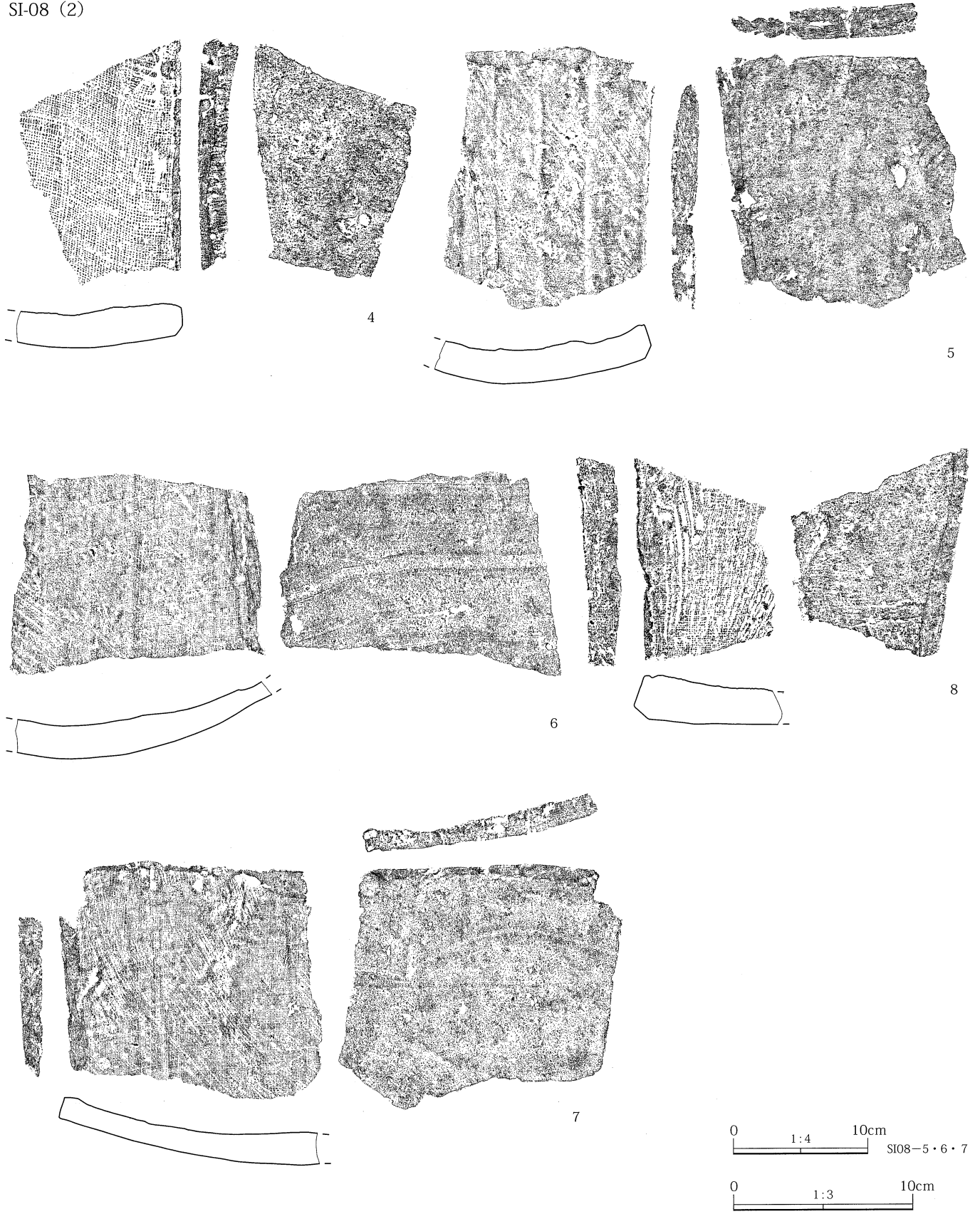


SI-08 (1)



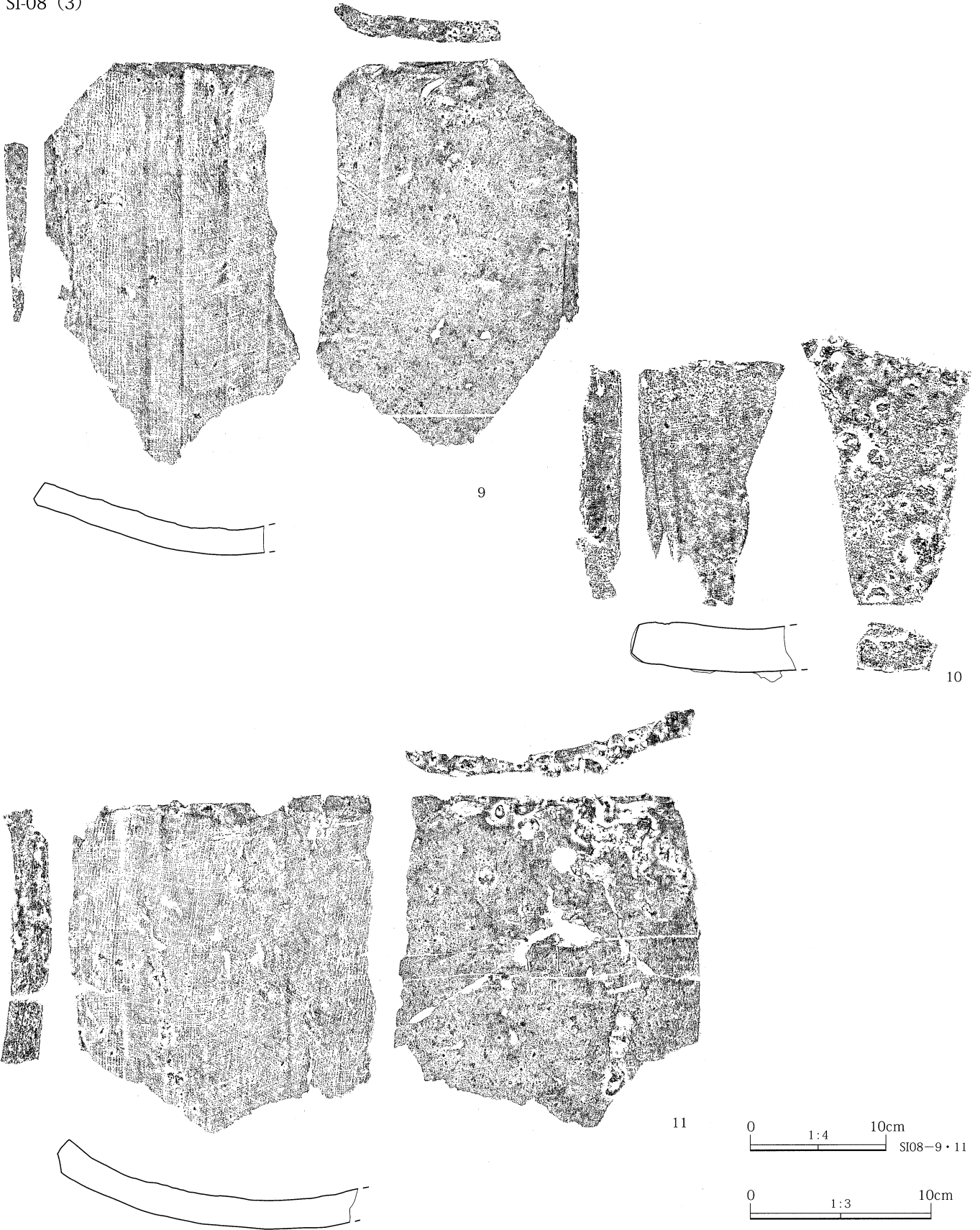
第 35 図 出土遺物実測図 (2)

SI-08 (2)



第 36 図 出土遺物実測図 (3)

SI-08 (3)



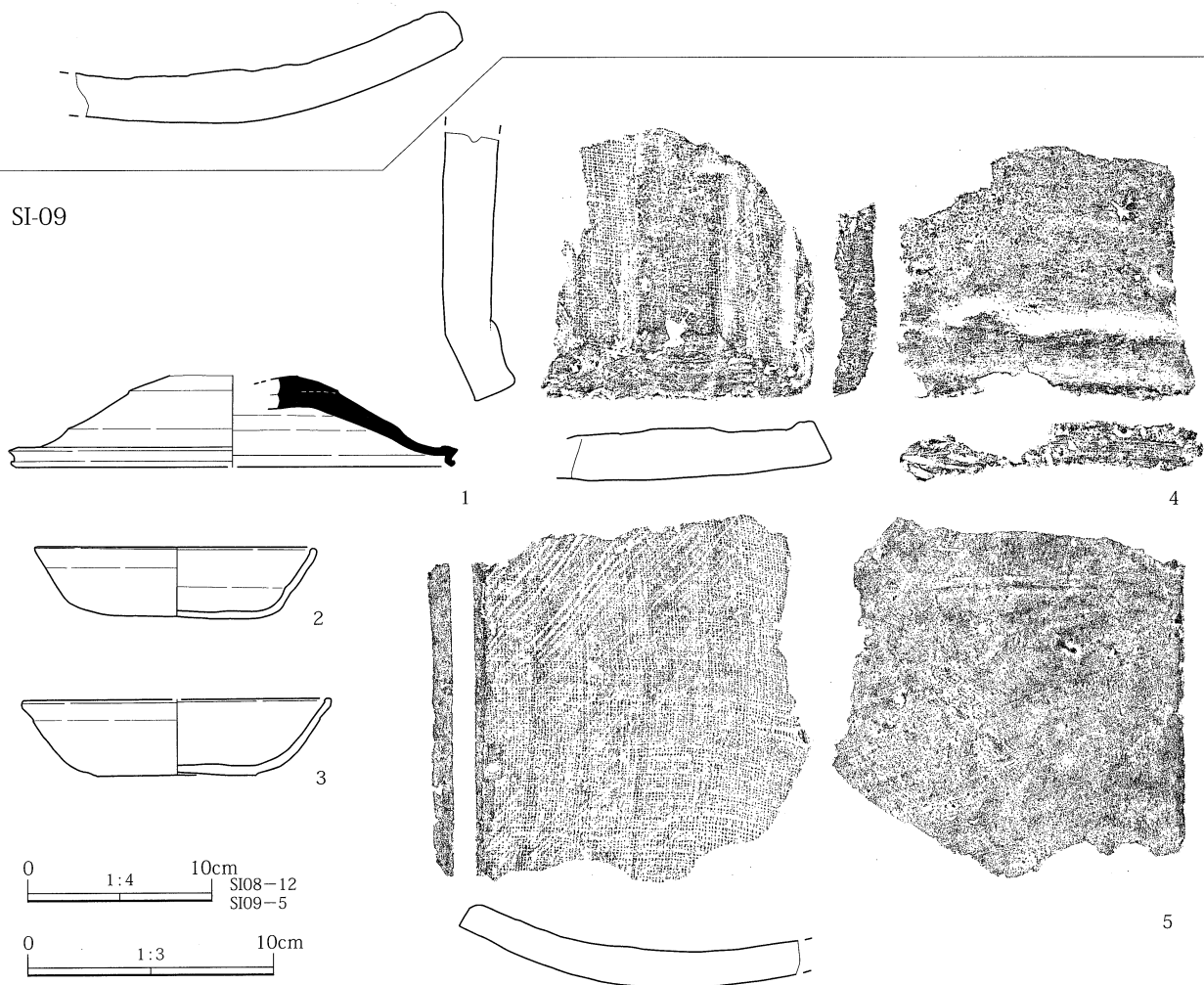
第 37 図 出土遺物実測図 (4)

SI-08 (4)



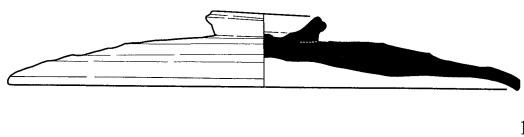
12

SI-09

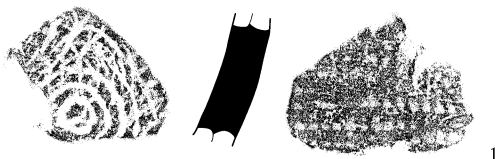


第 38 図 出土遺物実測図 (5)

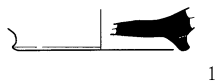
SI-11



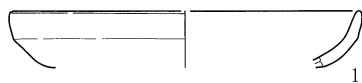
SI-12



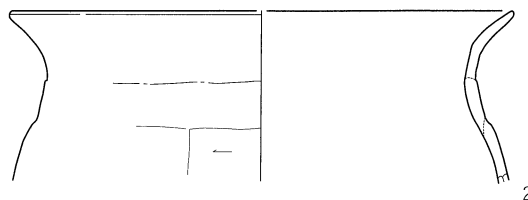
SI-13



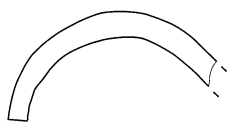
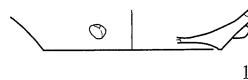
SI-14



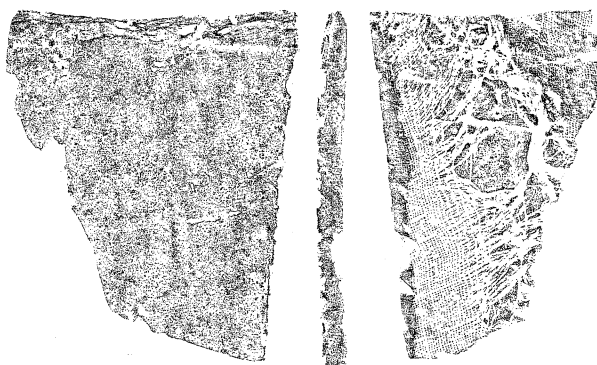
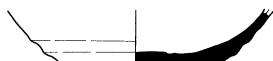
SI-10



SD-01



SD-02 (1)



0 1:4 10cm

SI10-3
SD02-2

0 1:3 10cm

0 1:2 5cm

SI12-1・2

2

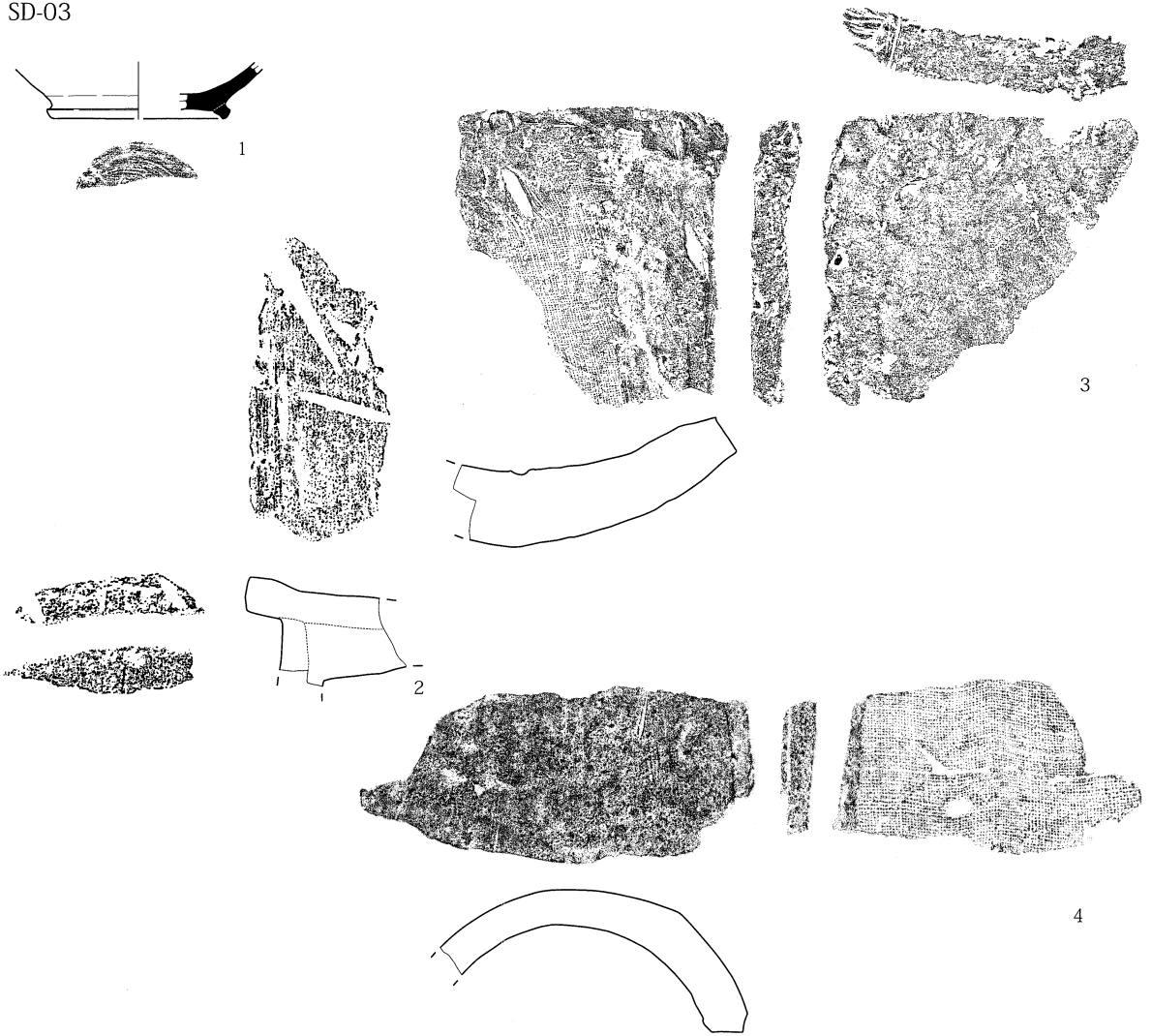
第 39 图 出土遺物実測図 (6)

SD-02 (2)

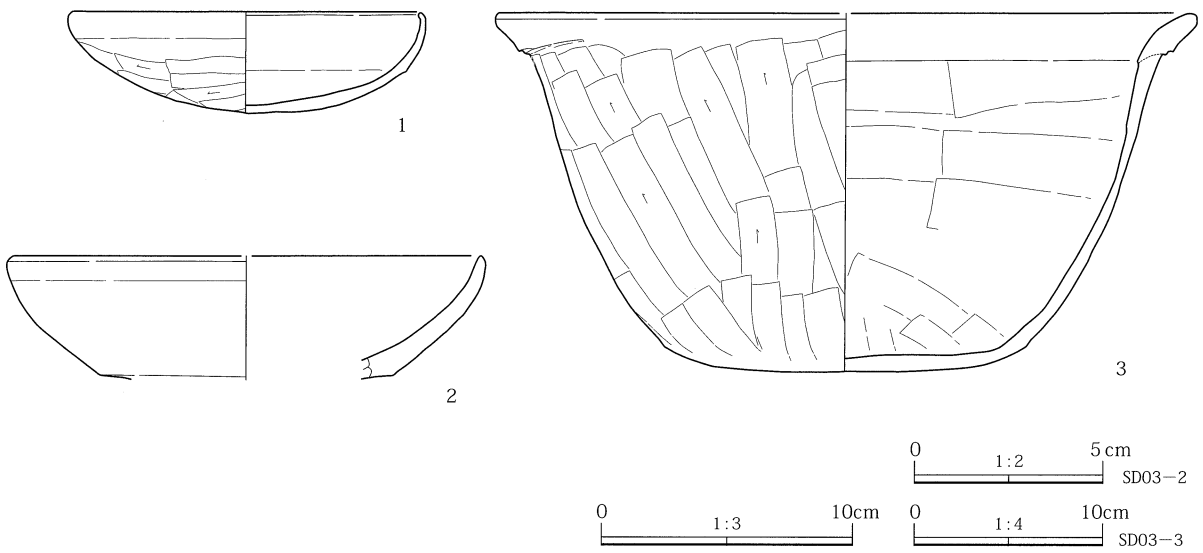


第 40 图 出土遺物実測図 (7)

SD-03

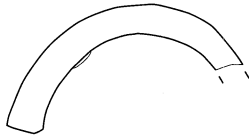
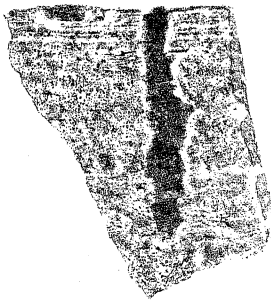
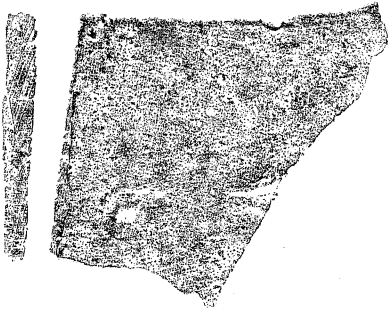
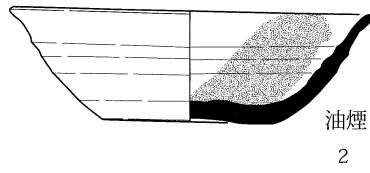
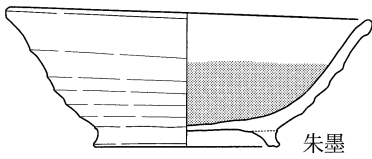


SK-01



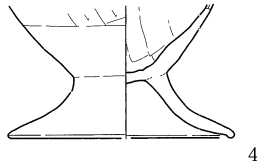
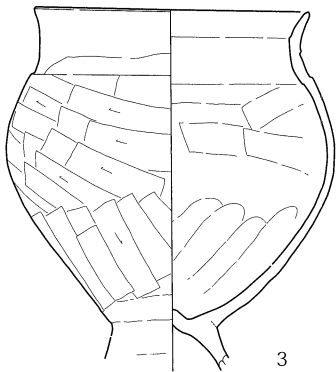
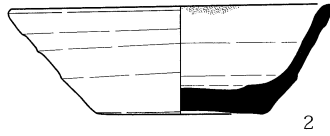
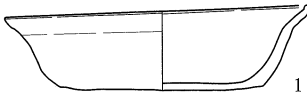
第 41 図 出土遺物実測図 (8)

SK-10

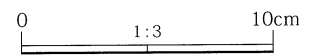
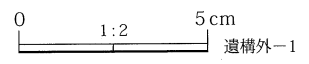
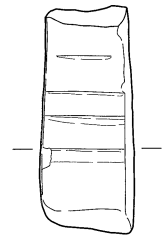


3

SK-11



遺構外



第 42 図 出土遺物実測図 (9)

表1 遺物観察表(1)

():復元値、[]:残存値を示す

遺構名	遺物 No.	器種	法量 (cm)	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI02	1	土師器 坏	口径 13.2 底径 — 器高 3.7	①良好②橙色③石英、角閃石、赤褐色粒④完存	外面 口縁ナデ調整。底体部ヘラケズリ。 内面 ナデ調整。	カマド内出土。
	2	須恵器 不明	口径 — 底径 — 器高 [3.7]	①普通②黄灰色③白色粒④5%以下	外面 ナデ調整。 内面 発泡する自然釉が付着。	
	3	土製品 鋳型か	口径 — 底径 — 器高 [3.2]	①普通②にぶい黄橙色③石英、黒色粒、角閃石④径 1/6	外面は緩やかな曲面を描く。付着物は認められない。	カマド内出土。
	4	土製品 瓦塔か	口径 — 底径 — 器高 [2.5]	①普通②明赤褐色③石英、角閃石	断面円形を呈し、下部に接合面を有する。瓦部か。	カマド内出土。
	5	土師器 甕・鉢 か	口径 — 底径 — 器高 [6.4]	①やや粗②橙色③石英、片岩、黒色粒④—	外面 棒状圧痕が横位に3条認められる。 内面 ナデ調整。	
	6	土製品 泥面子	長さ 2.3 幅 2.4 厚さ 0.8	①やや粗②橙色③赤褐色、角閃石④完存	お多福。	
SI03	1	土師器 坏	口径 11.9 底径 8.8 器高 3.3	①普通②橙色③石英、角閃石多量④完存	外面 体部ナデ調整。底部ヘラケズリか。 内面 ナデ調整。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	内面油煙付着。
	2	土師器 甕	口径 11.9 底径 — 器高 [7.9]	①良好②にぶい赤褐色③白色・赤褐色粒④径 1/2	外面 体部ヘラケズリ。 内面 ナデ調整。	
	3	瓦 平瓦	厚さ 3.0	①良好②黄灰色③石英、黒色粒	凹面 ハケメ、布目痕。端部面取り。自然釉付着。 内面 タタキ目、横位ナデ調整。端部面取り。 側面 ヘラ調整。 端面 ヘラ調整。	
	4	瓦 平瓦	厚さ 2.6	①良好②灰黄色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。 内面 横位ナデ調整。他個体付着か。 側面 ヘラ調整か。 端面 ヘラ調整か。	
	5	瓦 平瓦	厚さ 2.3	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。 凸面 横位ナデ調整。ヘラ状工具痕。 側面 端部面取り。 端面 ヘラ調整。 棒状圧痕。	
SI08	1	須恵器 坏	口径 (14.5) 底径 6.8 器高 4.3	①普通②灰黄色③白色・褐色粒④径 1/2	外面 ロクロ整形。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	
	2	土師器 甕	口径 (20.2) 底径 — 器高 [9.2]	①普通②にぶい褐色③白色粒、角閃石④径 1/4	外面 口縁部「コ」の字状。体部ヘラケズリ。 内面 体部ヘラナデ。	
	3	土師器 甕	口径 19.7 底径 — 器高 [15.2]	①普通②にぶい橙色③白色・赤褐色粒④径 3/4	外面 体部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	カマド出土。
	4	瓦 平瓦	厚さ 2.1	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 ナデ調整。端部面取り。 側面 ヘラ調整。	

表2 遺物観察表(2)

遺構名	遺物 No.	器種	法量 (cm)	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI08	5	瓦平瓦	厚さ 2.6	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 ハケメ、布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 ナデ調整。端部面取り。 側面 ヘラケズリ。 端面 ヘラケズリ。	
	6	瓦平瓦	厚さ 2.6	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部ナデ。 凸面 横位ナデ調整。	
	7	瓦平瓦	厚さ 2.5	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 ハケメ、布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 横位ナデ調整。端部一部面取り。 側面 ヘラケズリ。 端面 ヘラ調整。	
	8	瓦平瓦	厚さ 2.4	①良好②灰白色③石英	凹面 布目痕。 凸面 横位ナデ調整。端部面取り。 側面 ヘラケズリ。	
	9	瓦平瓦	厚さ 2.0	①良好②灰白色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 横位ナデ調整。端部面取り。 側面 ヘラ調整。 端面 ヘラ調整か。	
	10	瓦平瓦	厚さ 2.6	①良好②灰白色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 窯体付着か。 側面 ヘラ調整。	
	11	瓦平瓦	厚さ 2.3	①良好②灰オリーブ色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部一部面取り。 凸面 横位ナデ調整。窯体付着か。端部面取り。 側面 不明。 端面 不明。	
	12	瓦平瓦	器高 2.9	①良好②黄灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端面面取り。 凸面 横位ナデ調整。端面面取り。 側面 ヘラケズリ。 端面 ヘラケズリ。	
SI09	1	須恵器蓋	口径 (18.0) 底径 — 器高 [3.7]	①普通②浅黄色③石英、黒褐色粒、角閃石④径 1/4	外面 ロクロ整形。頂部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロ整形。	
	2	土師器坏	口径 11.5 底径 — 器高 2.9	①普通②橙色③石英、角閃石④径 3/4	外面 口縁部横位ナデ調整。底部ヘラ調整。 内面 横位ナデ調整。	
	3	土師器坏	口径 (12.6) 底径 (6.5) 器高 3.1	①普通②にぶい褐色③白色粒、角閃石④径 1/2	外面 口縁部横位ナデ調整。底部ヘラ調整。 内面 ナデ調整。	
	4	瓦平瓦	厚さ 2.1	①良好②灰オリーブ色③石英	凹面 布目痕、模骨痕。端部ケズリ。 凸面 粘土付加。 側面 横位ナデ。粘土紐痕を残す。 端面 ヘラ調整。 ヘラ調整。	
	5	瓦平瓦	厚さ 2.0	①良好②灰色③石英	凹面 ハケメ、布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 横位ナデ。 側面 ヘラ調整。	
SI11	1	須恵器蓋	口径 20.2 つまみ径 4.8 器高 3.2	①普通②灰黄色③石英、赤褐色粒④径 4/5	外面 頂部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロ整形。	

表3 遺物観察表(3)

遺構名	遺物 No.	器種	法量 (cm)	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI12	1	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 [3.5]	①不良②灰白色③石英、角閃石④5%以下	外面 格子タタキ目。 内面 青海波文。	
	2	須恵器 瓶類	口径 — 底径 — 器高 [2.3]	①良好②灰白色③石英、黒色粒④5%以下	外面 カキ目。 内面 ロクロ整形。	
SI13	1	須恵器 坏	口径 — 底径 (7.0) 器高 [1.6]	①不良②灰白色③石英④径 1/12	外面 ロクロ整形。 内面 ロクロ整形。	
SI14	1	土師器 坏	口径 (14.0) 底径 — 器高 [2.2]	①不良②明赤褐色③石英、角閃石④径 1/8	外面 口縁部横位ナデ調整。 内面 ナデ調整。	
SI10	1	須恵器 坏	口径 (12.9) 底径 (7.7) 器高 3.2	①良好②灰色③石英④径 1/4	外面 ロクロ整形。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	
	2	土師器 甕	口径 (20.0) 底径 — 器高 [6.8]	①不良②橙色③石英、赤褐色粒、角閃石④径 1/6	外面 体部ヘラケズリ。 内面 ナデ調整。	
	3	瓦 丸瓦	厚さ 1.4	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 ユビナデ調整。 凸面 横位ナデ調整。 側面 ヘラケズリ。 狭端部 ナデ調整。	泥条盤築。
SD01	1	陶器 皿	口径 — 底径 (7.0) 器高 [1.6]	①良好②灰黄色③黒色粒④径 1/8	外面 円形浮文。 内面 釉付着。	
SD02	1	須恵器 坏	口径 — 底径 6.4 器高 [2.1]	①普通②黄灰色③石英、角閃石④径 3/4	外面 ロクロ整形。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	SD02 出土。
	2	瓦 丸瓦	厚さ 1.9	①普通②灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、布綴じ目。端部面取り。 凸面 ナデ調整。 側面 ヘラケズリ。 狭端部 ヘラケズリ。	SD02 出土。
	3	瓦 平瓦	厚さ 2.7	①還元焰気味②灰色③石英、黒色粒	凹面 布目痕、模骨痕。端部面取り。 凸面 横位・縦位ナデ調整。端部面取り。ヘラ状工具痕。 側面 ヘラケズリ。 端面 ヘラケズリ。	SD02 出土。
	4	瓦 丸瓦	厚さ 1.0	①酸化焰気味②灰黄色③石英、黒色粒	凹面 布目痕。 凸面 ナデ調整。 側面 ヘラ調整。 狭端部 ナデ調整。	泥条盤築。 SD05 出土。
	5	瓦 軒丸瓦	瓦当径 (16.0) 瓦当厚さ 1.2 厚さ 1.6	①良好②灰色③石英、角閃石	瓦当面 複弁(六葉)蓮華文。 外面 ナデ調整。 内面 ナデ調整。タタキ目。輪積み痕。	泥条盤築。 SD05 出土。
SD03	1	須恵器 坏	口径 — 底径 (7.0) 器高 [2.3]	①普通②灰色③石英、黒色粒④径 1/4	外面 ロクロ整形。高台断面四角。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	SD03 出土。

表4 遺物観察表(4)

遺構名	遺物 No.	器種	法量 (cm)	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SD03	2	瓦 軒丸瓦	瓦当径 (14.6)	①良好②灰オリーブ色③石英、黒色粒	瓦当面 文様不明。外縁部に棒状圧痕。 外面 ヘラ状工具圧痕。 内面 ナデ調整。	泥条盤築。 SD03 出土。
	3	瓦 平瓦	厚さ 4.0	①酸化焰気味②明黄褐色③石英、黒色粒	凹面 布目痕。端部ケズリ。 凸面 横位ナデ調整。端部ケズリ。 側面 ヘラケズリ。 端面 ヘラケズリ。	SD03 出土。
	4	瓦 丸瓦	厚さ 1.8	①良好②灰色③石英、貝殻状片	外面 縦位ヘラナデ調整。 内面 布目痕。 側面 ヘラケズリ。	SD06 出土。
SK01	1	土師器 坏	口径 14.2 底径 — 器高 4.0	①普通②明褐色③石英、角閃石④径 4/5	外面 体底部ヘラケズリ。 内面 ナデ調整。	
	2	土師器 坏	口径 (19.0) 底径 (11.7) 器高 [4.9]	①不良②橙色③白色・赤褐色粒④径 1/4	外面 口縁部横位ナデ調整。 内面 ナデ調整。	
	3	土師器 鉢	口径 (27.8) 底径 — 器高 14.1	①良好②にぶい黄橙色③石英、雲母片④径 1/2	外面 体部ヘラケズリ。 内面 体部ロクロ整形。底部ヘラナデ。	
SK10	1	土師器 坏	口径 14.5 底径 7.3 器高 5.5	①普通②浅黄橙色③石英④径 3/4	外面 ロクロ整形。 内面 朱墨。	
	2	須恵器 坏	口径 14.4 底径 6.7 器高 4.6	①普通②灰白色③径 2 mm以上石英④完存	外面 ロクロ整形。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。油煙付着。	
	3	瓦 丸瓦	厚さ 1.4	①良好②灰色③石英、黒色粒	凹面 横位ナデ調整。自然釉付着。 凸面 横位ナデ調整。 側面 ヘラケズリ。 端面 ナデ調整。	
SK11	1	土師器 坏	口径 12.1 底径 8.1 器高 3.4	①不良②橙色③石英、角閃石④完存	外面 底部ヘラケズリ。 内面 ナデ調整。	
	2	須恵器 坏	口径 12.9 底径 6.7 器高 4.3	①やや粗②褐灰色③石英、黒色粒④完存	外面 ロクロ整形。底部回転糸切り。 内面 ロクロ整形。	内面油煙付着。SK01 出土。
	3	土師器 甕	口径 11.0 底径 — 器高 [14.4]	①良好②明赤褐色③石英、黒色・赤褐色粒④径 100%	外面 体部ヘラケズリ。台部横位ナデ調整。 内面 体部上半ヘラナデ、下半ユビナデ。	SK01 出土。
	4	土師器 甕	口径 — 底径 (9.0) 器高 [5.3]	①普通②明赤褐色③石英、赤褐色粒、角閃石④径 1/6	外面 体部ヘラケズリ。台部横位ナデ調整。 内面 体部ヘラナデ。	
遺構外	1	石製品 砥石	長さ [6.1] 幅 2.5 厚さ 2.0	断面方形。削痕を顕著に残す。凝灰岩製。		

VI まとめ

1 雑木味遺跡の出土瓦

本調査では、軒丸瓦が2点出土した。うち1点は外縁の一部しか残存していないため、今回は比較的残りの良いSD-02から出土した軒丸瓦（SD-02-5）について若干の検討をおこなう。

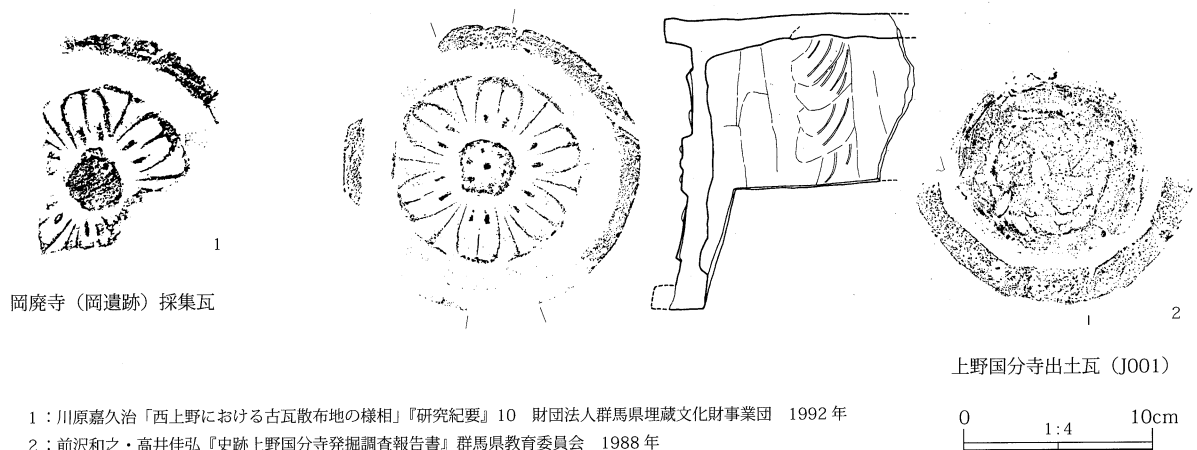
SD-02-5は複弁六弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は肉薄で界線により画された中に、棒状の短い子葉を2つおく。間弁はT字形をなし、中房にとどく。中房は突出し、小さい蓮子を1+6配する。この瓦は大江正行による山王・秋間系複弁七葉鏡瓦の分類に従えば第4段階に属すると考えられる⁽¹⁾。ここでふれる山王・秋間系複弁七葉鏡瓦とは、山王廃寺から出土する複弁七弁蓮華文軒丸瓦を祖形とするもので、この様式の瓦は4段階の文様変遷が認められている⁽²⁾。第1段階（第44図1）は複弁七弁で、やや大ぶりの中房に蓮子は1+4+8と二重にめぐり、外縁には竹管状の刺突文をめぐらせるものもある。山王廃寺のほか、太田市寺井廃寺・入谷遺跡、吾妻町金井廃寺から出土し、その一部は安中市秋間窯跡群の八重巻支群で焼成されたことがわかっている。つづく第2段階（第44図2）は複弁七弁で、蓮弁はやや肉薄となり小ぶりの中房に蓮子は1+4+8と二重にめぐらせる。高崎市田端廃寺・馬庭東遺跡、藤岡市水窪遺跡で出土しており、その一部はでえせえじ遺跡で焼成されたと考えられている⁽³⁾。第3段階（第44図3）は複弁七弁であるが、蓮弁・間弁の間隔が均等ではなく、蓮子も1+8と数を減じる。高崎市馬庭東遺跡・護国神社遺跡・本郷奥原遺跡で出土しており、馬庭東遺跡・本郷奥原遺跡のものは乗附窯跡群製と考えられている。第4段階の文様構成は前述のとおりで、雑木味遺跡のほか、上野国分寺跡（J001）、高崎市岡遺跡（第43図の1）で同範瓦が出土しており、供給窯跡は乗附窯跡群と考えられているが、実態は明らかではない。山王・秋間系第3・4段階は蓮子数や蓮弁数の減少といった変遷がみられるが、これは全国的に分布する川原寺式や雷文縁式（紀寺式）においてもみられる変化であり、山王・秋間系複弁七葉鏡瓦という様式の認定は妥当といえよう。また、各段階の年代観について、第1段階は7世紀第IV四半期とする松田猛の年代観は動かし難い⁽⁴⁾。第2段階については第1段階に比べ蓮弁が肉薄で中房が小ぶりとなる退化的な要素がみられるため、大江の示した690年頃から710年以前という年代観で概ね良いと考えられる。第3段階について大江は雑木味遺跡、馬庭東遺跡の成立と多胡郡建郡とが有機的関連にあると考え、710年頃から730年代頃までを想定している⁽⁵⁾。ただし、大江の第2～第3段階の年代観については雑木味遺跡が多胡郡衙、馬庭東遺跡が郡名寺院（郡名で呼ばれる地方寺院。郡寺・郡衙周辺寺院ともいう）とする自論に基づき、絶対年代を決定しているため、雑木味遺跡・馬庭東遺跡の性格が明らかでない現時点では、根拠に乏しいといわざるをえない。よって現時点では、第2段階が7世紀第IV四半期から8世紀第I四半期、第2段階に比べ蓮弁・間弁の間隔が均等ではなく、蓮子も数を減じる第3段階を8世紀第I四半期と想定しておきたい。第4段階について、前沢和之・高井佳弘は『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』の中で、上野国分寺で出土した同範瓦（第43図の2）を国分寺創建期以前に生産された瓦（7世紀後半～8世紀前半）としている⁽⁶⁾。第4段階の瓦は第3段階に比べ蓮弁や蓮子の数を減じ、蓮弁が肉薄になり、間弁のT字部分の反りが弱いなど退化的な要素がみられるため、7世紀後半まで遡ることはないであろう。したがって現段階では国分寺の創建された740年代も含む8世紀第II四半期頃の年代を想定しておきたい。

製作技法について、SD-02-5は瓦当上半部と丸瓦部の一部しか残存していないが、外縁と瓦当部との境に粘土の継ぎ目が認められることから、あらかじめ作った丸瓦円筒の内側に瓦当部を嵌め込み、不要な丸瓦

部の粘土を切ったいわゆる瓦当嵌め込み技法によるものと考えられる。瓦当裏面は粗い指ナデ調整をおこない、布目等はみられない。丸瓦部は凹面に顕著な粘土紐の合わせ目や同心円文の当て具の痕跡はみられるが、模骨や布を使用した痕跡は認められないため、泥条盤築技法によって作られたと考えられる。泥条盤築技法で作られた瓦は雑木味遺跡の丸瓦のほか、同時期で近接地域のものとしては上野国分寺の軒丸瓦・馬庭東遺跡の平瓦・岡麿寺の丸瓦、埼玉県馬騎の内麿寺・勝呂麿寺の平瓦にも認められる。この技法について大脇潔は「製作技法が須恵器と共通することなどから、伝統的な造瓦技術を有する工人集団の系列に属さない須恵器工人によって、いわば見よう見まねで作られたと考えられる。したがって、造瓦技術を有する工人の存在が皆無の地域では、時代を問わず出現する可能性がある」と指摘している⁽⁷⁾。山王・秋間系の瓦生産を担ったと考えられている秋間窯跡群・でえせえじ遺跡・乗附窯跡群は採集資料からいずれも瓦陶兼業窯であることが明らかであるため、須恵器工人が瓦生産に関与した可能性は高いといえる。須恵器工人と瓦工人の協業の実態や工房での生産体制については、現段階ではそれを論じられるほどの資料がないため、須恵器工人が瓦生産に関与した可能性の指摘にとどめておく。

群馬県内では窯跡や工房の調査事例が少ないこともあり、窯の構造や瓦などの生産体制、各窯間での瓦範・工人の移動など残された課題も多い。今後調査の進展を待ち、より詳細な検討を加えたい。

- (1) 大江正行 1988「田端麿寺の推定一瓦類一」『田端遺跡—上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 注1に同じ
- (3) 注1に同じ
- (4) 松田猛 1991「上毛野における古代寺院の建立」『信濃』43—4
- (5) 注1に同じ
- (6) 前沢和之・高井佳弘 1988『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』群馬県教育委員会
- (7) 大脇潔 1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所



1：川原嘉久治「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要』10 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 1992年
2：前沢和之・高井佳弘『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』群馬県教育委員会 1988年

第43図 雑木味遺跡出土瓦の同範品



第44図 山王・秋間系複弁七葉燈瓦第1段階から第3段階の瓦

2 雑木味遺跡で確認された遺構と遺物

雑木味遺跡は、以前から瓦が採集されていることから、寺院跡もしくは郡衙跡の可能性が想定されてきた。今回の調査では、それを直接的に立証できる遺構・遺物は認められなかったが、古代を中心とした遺構群を確認することができた。出土した遺物は7世紀代～10世紀代に及ぶが、8・9世紀代のものを主体としている。なお古墳時代以前の遺物は、黒曜石が2点出土したのみである。

遺構 遺構は竪穴建物跡13棟、基壇状遺構1基、溝5条である。土坑・ピットも確認されているが、掘立柱建物跡を構成する柱穴は検出されなかった。

竪穴建物跡は、いずれも竪穴の掘り込みが浅く、その形状も不整形で、また均整のとれた柱穴配置も認められない。その燃焼施設は明確なカマド構造をもっておらず、SI-02・SI-03・SI-09では、竪穴南側に焼土および炭が検出され、一部南壁面に燃焼箇所が及んでいた。

竪穴建物跡から出土した瓦は、覆土中に混入したものと転用したものがある。転用したものにはSI-08のようにカマド内に敷きつめたものと、SI-03のように床面に台のように設置したものがある。いずれも9世紀代に位置づけられる土器群を伴っている。なお8世紀代の遺物が出土したSI-02ではそのような転用した状況は認められなかった。

基壇状遺構(SI-10)は調査区北東端で確認された。部分的な検出にとどまっており、その形状・規模の詳細については不明である。その性格を示す遺物は出土していないが、浅い周溝内より土師器・須恵器とともに丸瓦1点が出土している。この1区北東部は出土した遺物も少量で、竪穴建物跡の分布も希薄であり、かつSD-02・SD-03溝の内側に当たることから、1区北西部の竪穴建物群とは性格を異にする一帯であると想定される。

溝は5条確認されている。SD-01は基本土層Ⅱ層を切っており、他の遺構より新しい暗渠である。SD-02・SD-03は、いずれも基本土層Ⅲ層より掘り込まれており、他の竪穴建物跡と共通する。SD-02・SD-03は掘り込みは切り合っていないが、覆土の堆積状況からSD-02→SD-03の順に掘削したものと想定される。SD-02は長楕円形の土坑を連続させる相対的に深い掘削を施す一方で、SD-03は一部底面が平坦をなす浅い掘り込みをなす。SD-02は南北に走り、南側で東方向へ屈曲しており、区画溝としての性格を有していると想定される。

SD-04は南北に走行し、東へ屈曲する。その走行方向は、SD-02と類似している。しかし、SD-02・SD-03では、その遺構上面を基本土層Ⅱ層が均一水平に堆積するのに対して、SD-04では基本土層Ⅱ層は不連続な堆積をなす。これらSD-02・SD-03・SD-04はその走行方向は類似するが、その土層堆積状況からSD-02・SD-03→SD-04の先後関係が想定される。

SD-07は東西に走る掘り込みの浅い溝である。その東端は地山礫層に至って収束する。掘り込み面はSD-02・SD-03と共通する。覆土中からは瓦も出土していることから、建物跡に付随する溝とも想定されたが、その証左となる状況は把握できなかった。

今回の調査では、寺院跡もしくは郡衙跡を直接的に示す遺構は確認できなかったが、調査区の周囲には方形の高まりをなす一角や礎石の可能性も考えられる大形の礫が目視された(写真図版PL6)。その帰属時期については明確にはできないが、注意を要する。なお第45図中の東側高まりについては、試掘調査によってその南側にトレンチを入れているが、基壇等の明確な遺構は認められていない。

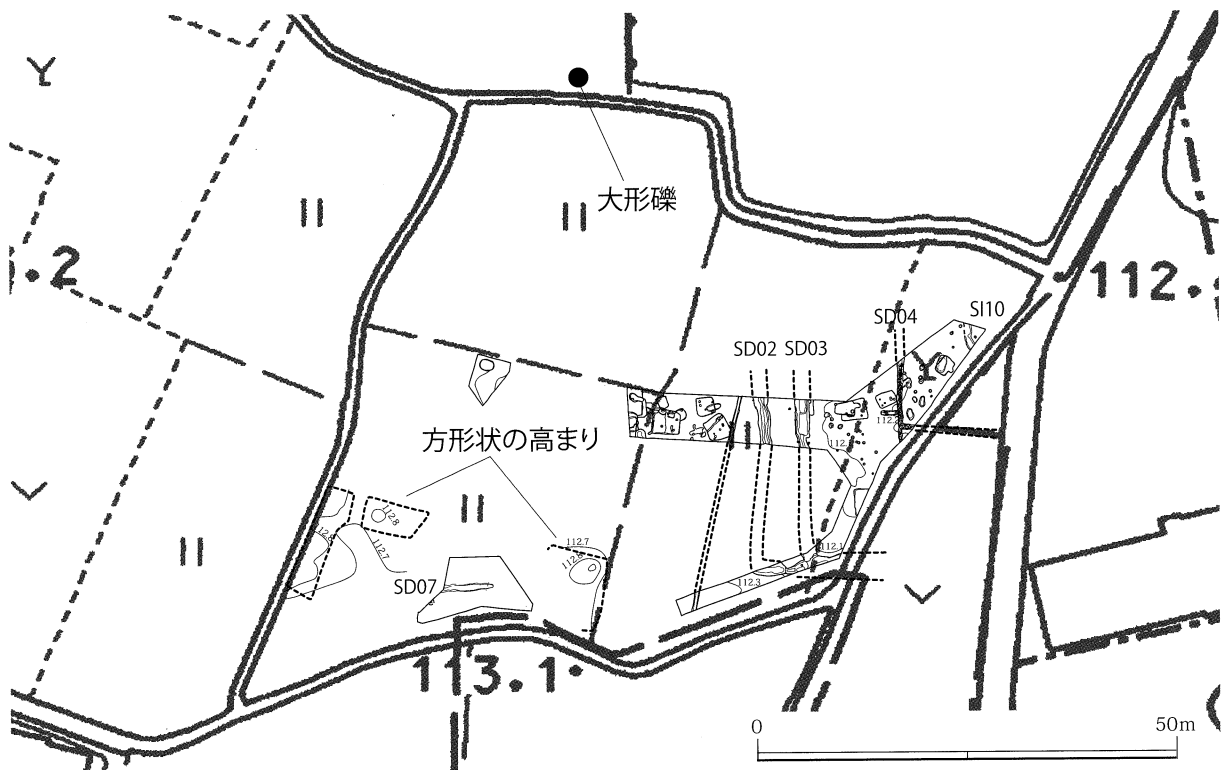
遺物 調査区内からは、瓦が多量に出土している。瓦葺きの建物跡は確認されておらず、多くのものが遺構

覆土中より出土している。また一部の竪穴建物跡では、再利用した状況が看取された。SD-02より出土した軒丸瓦（5）は、複弁六葉蓮華文と想定される。同範とされるものが上野国分寺、岡遺跡（岡麿寺）、雑木味遺跡採集品において確認されている。泥条盤築法を用い、内面には一部同心円状の当て具痕を残す（以上、前項参照）。丸瓦の多くは同様の技法によって製作されているが、SD-02（2）およびSD-03（4）は内面に模骨痕・布目痕を残す。SD-02出土の軒丸瓦（5）は8世紀代に位置づけられ、瓦転用の竪穴建物跡が9世紀代の遺物を伴うことから、8世紀代に当地に瓦を有する建物跡が構築され、その後瓦が転用された可能性も考えられる。ただし出土した瓦には、窯体が付着したものが認められる点は留意しなくてはならないだろう。

SI-02のカマドからは鋳型の内型と想定される土製品が出土している。ただし竪穴内において鋳造を行ったと想定される痕跡は確認できなかった。また同じカマド内からは瓦塔片の可能性が想定される土製品も検出された。これらがどのような経緯で本竪穴内に入ったのかは不明であるが、8世紀代に位置づけられる土師器坏が出土していることから、その時期は8世紀を下限とするものと考えられる。

小結 以上のことから雑木味遺跡は、一般的な集落遺跡とは様相を異にすることが窺え、8世紀を上限とする仏教関連施設が存在した可能性も否定できない。本遺跡で確認された遺構は8世紀を上限としており、7世紀以前の集落の延長線上に本遺跡が形成されたのではなく、8世紀に至って新たに築かれたものと考えられる。これはとくに多胡碑との関連を考えれば、多胡郡建郡との関連が想定されよう。つまり、旧来の集落の編成ではなく、建郡に伴う新たな施設の構築といった事象も想像されるのである。

なお雑木味遺跡ではいずれの遺構も浅間B軽石もしくはその包含層（基本土層Ⅱ層）直下で掘り込みが確認されているものの、その遺構覆土中にはそれらが混入しておらず、浅間B軽石降下前に広く削平された状況が推測される。そのため基壇状の遺構など高まりをなす遺構は一部は削平されている可能性が推測され、微地形の詳細な観察が必要であることが、今後の調査の留意点として挙げられる。



第45図 調査区周辺状況

写真図版



遺跡全景（鍋川方向を望む）

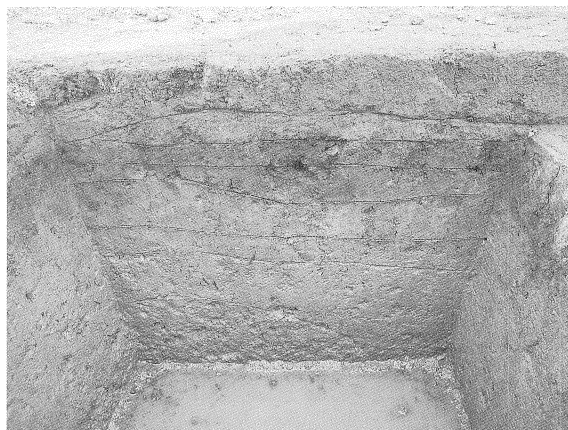


調査区全景

PL 2



基本土層 I



基本土層 II



SI-01 全景



SI-02 全景



SI-02 鑄型出土狀況



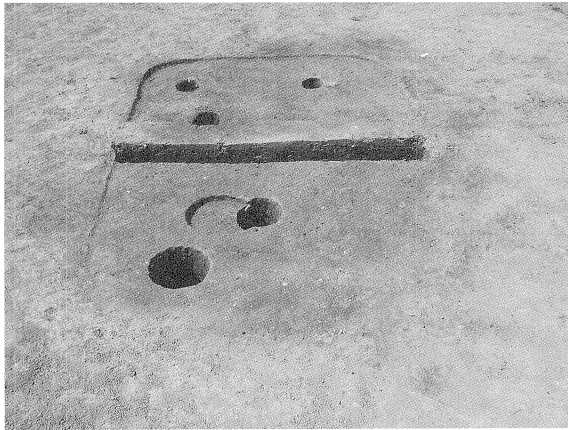
SI-03 全景



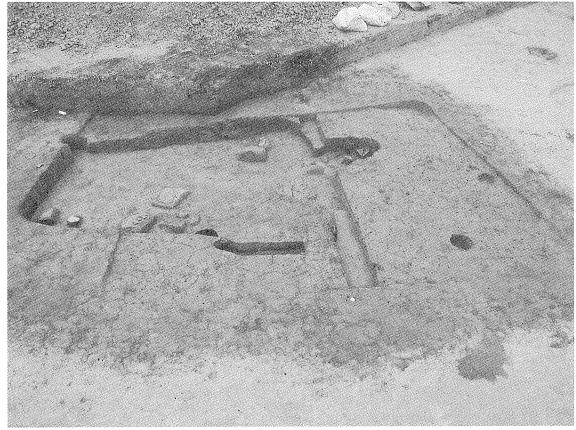
SI-04 全景



SI-05 全景



SI - 06 全景



SI - 07 全景



SI - 08 全景



SI - 08 カマド全景



SI - 09 全景



SI - 11 全景



SI - 12 全景



SI - 13 全景



SI - 14 全景



SI - 10 全景



SI - 11 土層堆積状況



SD - 01 全景



SD - 02 全景



SD - 02 (南側 SD-05 部分) 全景



SD - 02 土層堆積状況



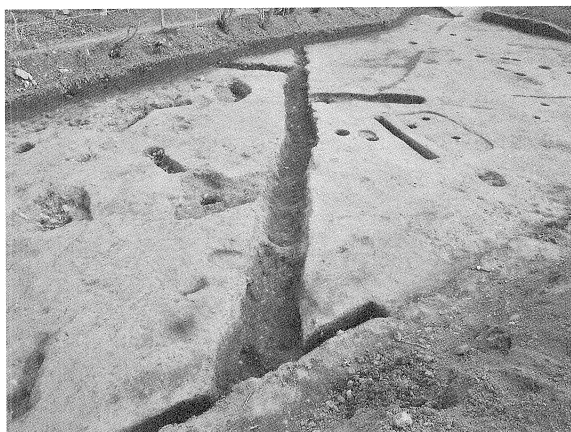
SD - 03 全景



SD - 03 (南側 SD-06 部分) 全景



SD - 04 全景



SD - 04 掘り方全景



SD - 04 土層堆積状況



SD - 07 全景



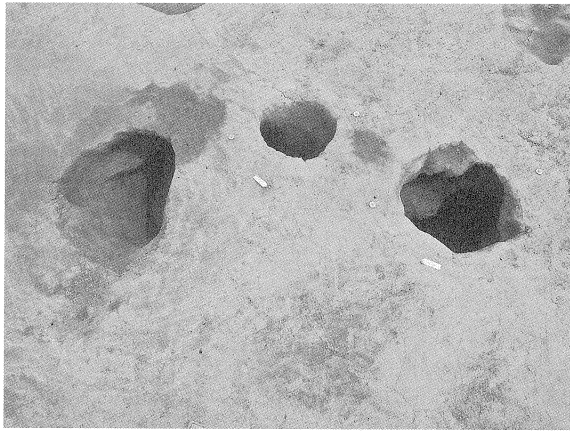
SK - 01 全景



SK - 02 全景



SK - 03 全景



SK - 05・06・08 全景



SK - 06 全景



SK - 07 全景



SK - 08 全景



SK - 09 全景



SK - 10 全景



SK - 11 全景



大形礫露出状況

SI-02



1



2



3



4

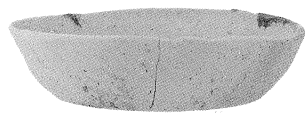


5

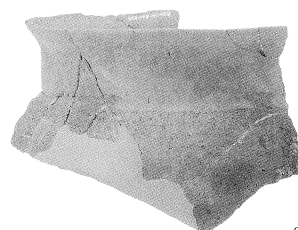


6

SI-03 (1)



1



2



3

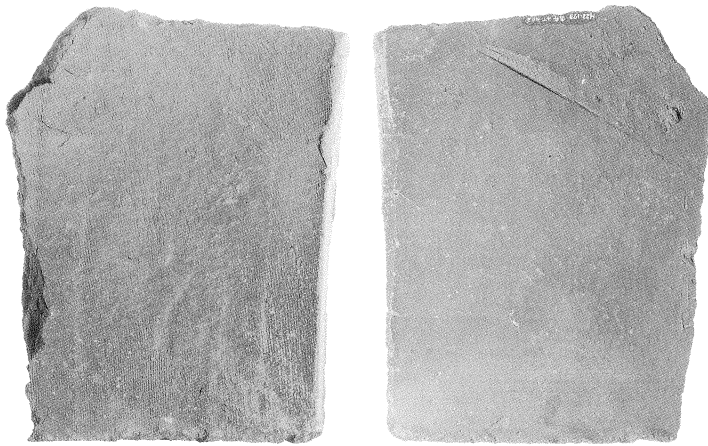
出土遺物 (1)

PL 8

SI-03 (2)



4



5

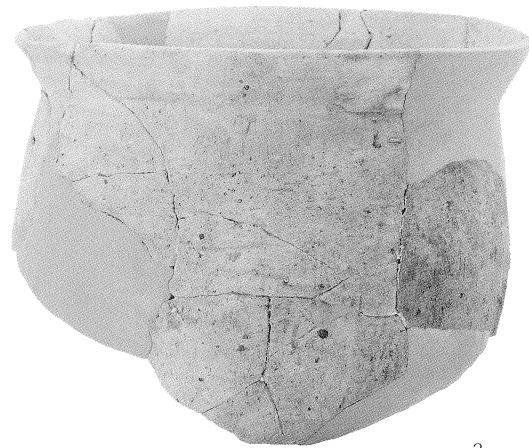
SI-08 (1)



1



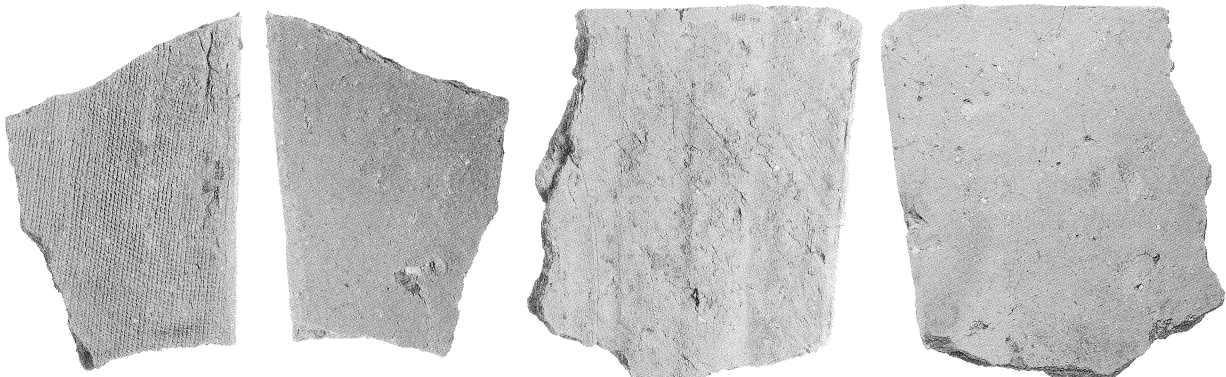
2



3

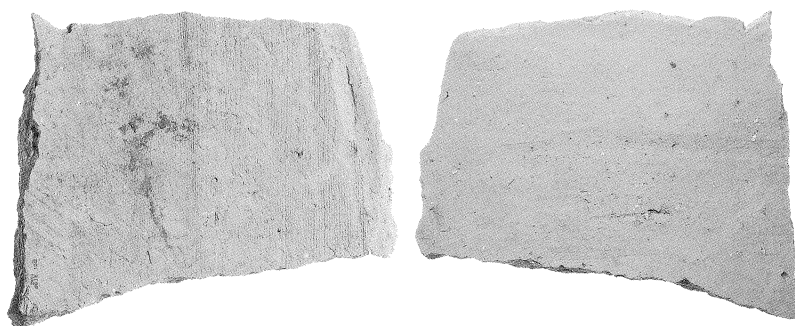
出土遺物 (2)

SI-08 (2)



4

5



6



7



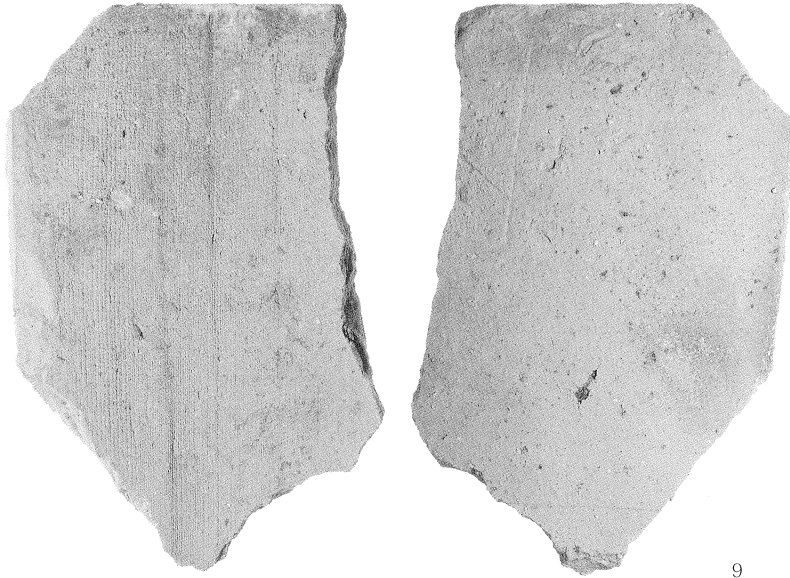
8

10

出土遺物 (3)

PL 10

SI-08 (3)



9



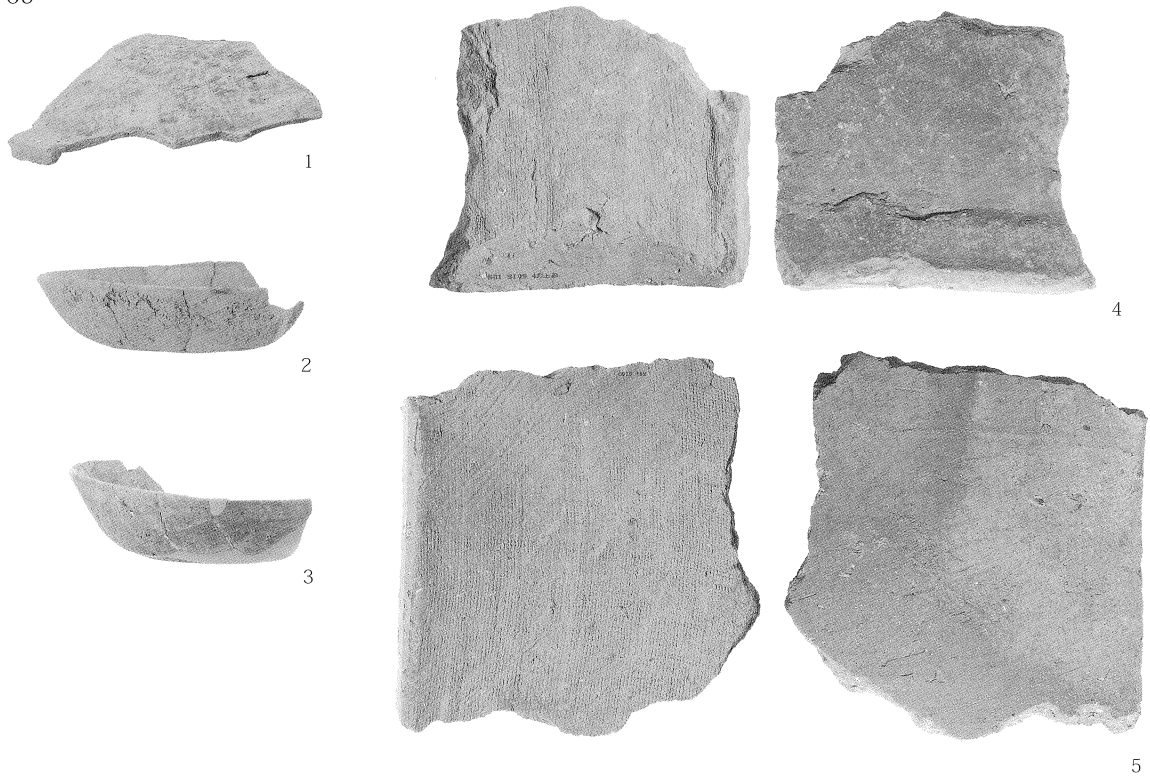
11



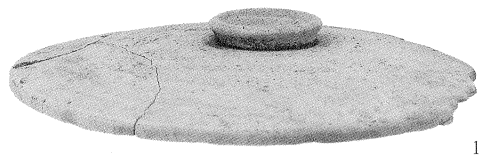
12

出土遺物 (4)

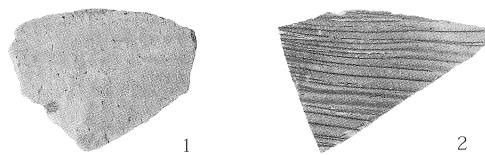
SI-09



SI-11



SI-12



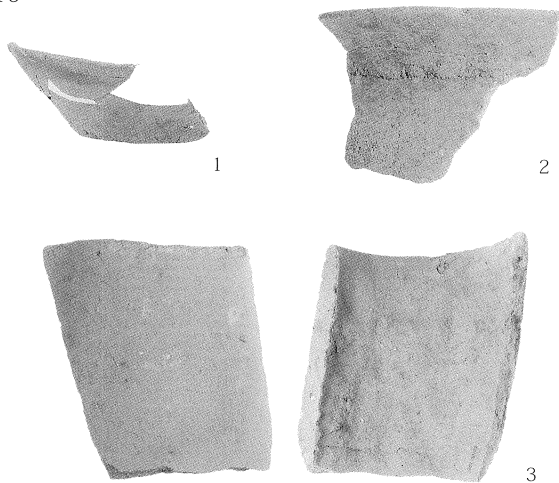
SI-13



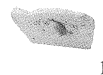
SI-14



SI-10



SD-01



SD-02 (1)



P L 12

SD-02 (2)



2

4



3



外面



内面



瓦当面



瓦当裏面

5

出土遺物 (6)

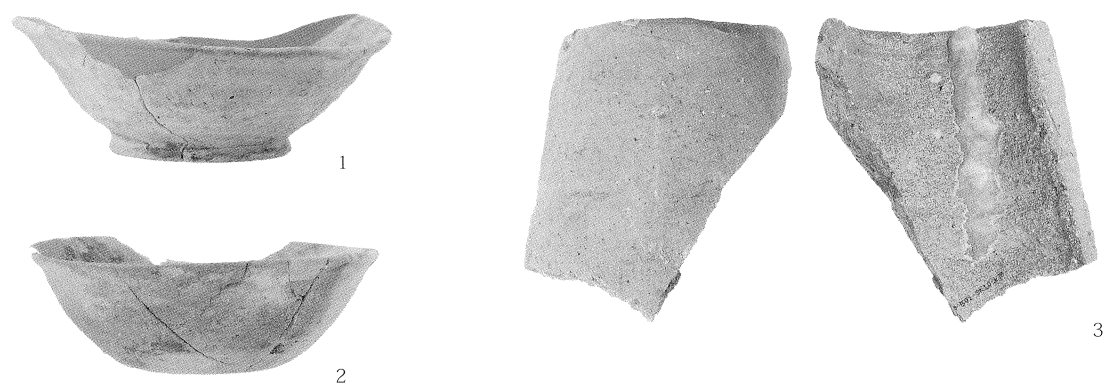
SD-03



SK-01



SK-10



PL 14

SK-11



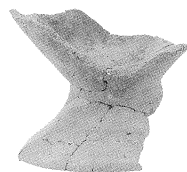
1



2

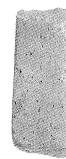


3



4

遺構外



1

出土遺物 (8)

報告書抄録

フリガナ	ヨシイ・ザッキミイセキ		
書名	吉井・雑木味遺跡		
副書名	分譲地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査		
巻次			
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第289集		
編著者名	田口一郎 手島芙実子 石丸敦史		
編集機関	高崎市教育委員会		
発行機関	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1 TEL 027-321-1292		
発行年月日	平成23年9月30日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
よしい ゴツキミイセキ 吉井・雑木味遺跡	ぐんまけん たかさきし 群馬県高崎市 よしいまち よしいあざ 吉井町吉井字 ゴツキミイ 614 雑木味 ばんちほか 番地他	102020	501	36° 15' 36"	138° 59' 20"	20110322 ~ 20110428	474.79㎡	分譲地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
吉井・雑木味遺跡	集落	古代	竪穴建物跡	13 棟	土師器	複弁六葉蓮華文軒丸瓦出土。
			基壇状遺構	1 基	須恵器	
			溝	8 条	瓦	
			土坑・ピット	35 基	近世陶磁器 石器（黒曜石剥片、砥石）	

高崎市文化財調査報告書第 289 集

吉井・雑木味遺跡

一分譲地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査一

平成 23 年 9 月 23 日印刷

平成 23 年 9 月 30 日発行

編集／高崎市教育委員会
発行／高崎市教育委員会
印刷／朝日印刷工業株式会社
